

酒々井町の寺社

【出典】

- 1 酒々井町の歴史 昭和54年10月15日発行
- 2 教養読本 昭和43年度発行
- 3 しすいの文化財 第一集 昭和48年3月31日発行
- 4 しすいの文化財 第二集 昭和52年3月発行
- 5 成田街道酒々井の歴史散歩 平成2年8月8日発行

平成19年7月31日

酒々井町企画政策課

目次

一	奈良朝時代	2
二	神社寺院の創建	4
三	本佐倉と寺院	4
四	大名と寺社の統制	4
酒々井町の寺院		
	吉祥寺	7
	大佛頂寺	11
	経胤寺	13
	東光寺	18
	妙胤寺	22
	浄泉寺	24
	東伝院	29
	妙楽寺	32
	清光寺	34
	勝蔵院	38
	長勝寺	43
	松雲寺	44
	新光寺	46
	光徳院跡・酒々井地藏院	50

酒々井円福寺	52	酒々井東城寺	53
上岩橋長福寺	54	尾上延命寺	55
尾上正福院	56	飯積泉福寺	57
馬橋相持院	58	墨石井泉光院	59
中川西蔵院	59		
長勝寺跡・長勝寺脇館跡・善龍寺跡	60		
文殊寺	61	空鏡寺	63
酒々井町の神社			
中川水神社・根古谷妙見神社	65		
新宿大鷲神社	66	酒々井八坂神社	67
横町朝日神社	66	酒々井麻賀多神社	70
上岩橋駒形神社			
上岩橋菊賀神社			
尾上住吉神社	74	飯積伊豆神社	75
墨六所神社			
馬橋香取神社・伊篠白幡神社			
柏木七社神社・上岩橋大鷲神社			
本佐倉愛宕神社			
酒々井町の獅子舞（墨・上岩橋・馬橋・伊篠）	82		
酒々井町文化財一覧	85		
酒々井町神社一覧	87		
酒々井町寺院一覧	88		

一 奈良朝時代

長熊廃寺とその背景

一、位置と環境

遠くからでも神社があることがすぐわかるように、杉の枝が空にぬきんでている。近づくとも、杉の古木の並木があつて、杉の根元のあたりは雑木と笹藪（ささやぶ）におおわれている。そんな二列の並木にはさまれて、長い参道が西から東に向かつてつづいている。いかにも由緒深い神社の参道といった感じである。本佐倉字南大堀にある愛宕神社の参道である。その奥にある神社の社殿は、かやぶき流（ながれ）造りの見事なもので、酒々井町の数ある神社のなかでも最も優れた建造物である。その社殿から南側三十mばかり離れたところに長熊の鎮守五良神社がある。五良神社の参道と愛宕神社の参道も、三・四十mぐらいの間隔をおいて並行している。その参道と参道の間から奈良朝時代の本格的な伽藍（がらん）配置の寺院趾が発見されたのである。ここは、本佐倉、長熊、上代の三村の寄り合い境界地である。近くに上代の鎮守があり、三つの神社が集まっている。

寺院趾は、昭和二十六年八月、立正大学考古学会によつて発掘され、「長熊廃寺」と名付けて学会に発表された。廃寺の金堂趾が長熊字五良であること、和名抄に「長隈」（長熊）の地名があること等の理由から長熊廃寺と名付けられ

たのである。詳細は、立正大学考古学開放「銅鐸」第九号に「長熊廃寺址発掘調査報告書」と題して報告されており、この報告書を見ると、酒々井町の古代文化に深い関係があつたことがわかる。

一、発掘の概要

- ① 年代 奈良朝前期（白鳳時代）
- ② 形式 法起寺式伽藍配置
- ③ 発掘経過 金堂址復原、講堂址、廻廊址一部発掘
- ④ 出土品 鏡瓦、字瓦、土師器、須恵器、瓦塔破片

二、廃寺の文化的考察

遠い奈良朝時代に、こんな草深い地に、だれか、どうして大伽藍を造つたのか、その背景について銅鐸第九号に、倭名抄からみた長熊廃寺と題して後藤重信氏が詳細に論説されている。その要旨を記して酒々井町の古代文化の考察に資したい。

一、長熊廃寺の文化的背景を知ることがこの寺の性質を究め

るに重要なことである。これには「和名抄」にある印旛郡の本郷、三宅（屯倉）郷がどこにあつたかを比定しなければならぬ。

二、和名抄の本郷の文化的背景、地理的条件、各方面の文献等

から推して、本郷三宅郷が「形勝足以制全部」ところの条件にかなう酒々井、本佐倉付近であり、酒々井付近が印旛郡の政治文化の中心であった。

三、長熊も、酒々井を中心とする文化圏の一環をなしており、そこに豪族が集まり栄えて、そのうちのある者が長熊の地に大寺院を建立したものだろう。長熊廃寺は、その背景となつた豪族と盛衰をともにしていつしか荒廃したものであろう。

以上が後藤氏の四千字にわたる論文の要旨である。奈良朝時代に印旛郡の中心であった地点は酒々井町のどの辺に比定したらよいだろう。

約千三百年前のことである。当時の文化を知る酒々井町の資料としては、古墳、土師器、須恵器、神社、寺院等がある。現在の段階では、これらの資料を精密に調査して総合的に判断を下す程度であらう。今後の研究問題である。

一一 寺院の創建とその背景

酒々井町の寺院は、無住寺・廃寺等を加えると三十余ヶ寺になる。千葉氏猪鼻山時代は、十一世紀の初期から十五世紀中期までであるが、この時代に創建されたと寺伝にあるのは五ヶ寺である。

吉祥寺 大同二年（八〇七） 開基弘法大師

大仏頂寺 大同二年（八〇七） 開基弘法大師

常胤寺 康治二年（一一四三） 開基千葉常胤

東光寺 康元二年（一一五七） 開基俊誉上人

妙胤寺 正安元年（一一九九） 開基日祐上人

吉祥寺・大仏頂寺の大同二年には疑問点もあるが、両寺の現任職の世代を勘案して推定すると、十世紀前後に創建したものと考えてよいようである。常胤寺は現在の経胤寺である。始め真言宗であったが、途中、日蓮宗に改宗して経胤寺と改称するようになったという。

以上の五ヶ寺の他に年号不詳の無住寺、廃寺のなかでこの時代に創建されたものがいくつかあったと思われる。

十一世紀〜十五世紀ごろ、すでに酒々井町の地域には数ヶ寺あったことがわかる。寺院とともに神社等も当然建立されていたはずである。寺院や神社が存在したことは、それを建立し、維持してゆく力をもつた莊園や名（みょう）があり、それを支配した豪族が居住しており、その豪族は、千葉氏の一族か、あるいはその家臣であった。

源義家の物語、源平の合戦、南北朝の争奪戦等、数々の日本歴史の一こま一こまの中に、千葉氏を支えながら苦闘をつづけた、われわれの祖先達の姿がある。そうした関係が数世紀つづいたのであった。

二 神社寺院の創建

酒々井町の寺院のほとんどは、中世千葉氏と深いかわりをもつて創建されたものようである。酒々井町の寺院中で古いとされているのは、吉祥寺と大佛頂寺である。両寺とも寺伝によると大同二年（807）弘法大師の開基となつてゐる。その真偽はともかくとして両寺とも古い創建であることには間違いない。中世以前の創建としても、中世の不安定時代を維持してきた歴史の中には、それだけの力のある千葉氏関係の庇護をうけてきたと考えられる。千葉氏時代に創建されたと伝えられる神社・寺院は次のようである。

- 一、清光寺 弘治二年（一五五六） 開山 月峯上人
 - 二、浄泉寺 延徳二年（一四九〇） 開基 粟飯原胤光
 - 三、東伝院 永正元年（一五〇四） 開基 不詳
 - 四、経胤寺 大永元年（一五二二） 開山 日怡上人
 - 五、妙楽寺 天文十三年（一五四四） 開基 木村胤綱
 - 六、長福寺（無住）延宝 六年（一六八七） 不詳
 - 七、長勝寺（廃寺）天文二十年（一五五二） 鰐口の銘文
 - 八、駒形神社 天正七年（一五七九） 建立 木村胤綱
- 以上一社七寺の創建が伝えられるほかに、年代不詳の神社寺院でこの時代に創立されたものが多いと思われる。
- 佐倉城の城下として、その周辺地区として、千葉氏の一族、あるいは家臣の有力者が多く集つてきて神社寺院の創

建となり、当時の文化の中心的存在を形成していたものと思われる。

三 本佐倉と寺院

本佐倉地区には、中世の寺院が数多くあつた。今数えられるもので十一カ寺ある。経胤寺、吉祥寺、妙胤寺、清光寺の外に廃寺となつてゐる文殊寺、長勝寺、善龍寺、光徳院、浄真寺、善法院、龍性院などがあつた。江戸時代本佐倉町、本佐倉村合わせて百余戸にすぎなかつた地域に十一カ寺は多すぎるのであるが、これは本佐倉は千葉氏の城下町であり、本佐倉時代にはこの附近に千葉氏の有力家臣が多く住んでおり、自らの菩提寺を建立したが、千葉氏の滅亡によつて、家臣は四散してしまつた。従つて寺院の経営が困難となり、やがて廃寺となつたとの見方もできる。

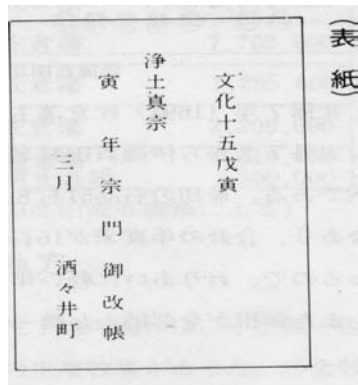
注：寺院の創建は中世であるが、都合により、その事績については近世から現代にいたるまでを記述した。

四 大名と寺社の統制

江戸幕府は大名の軍事力、経済力を警戒して各種の手段を用いて大名を統制した。参勤交代の制度を設け一般に在府一年、在国一年であるが、関東の大名は半年交代であつた。参勤の費用や、江戸屋敷での費用がかかり大名の財政に大きな負担となつた。元和元年（1615）二代将軍秀

忠は武家諸法度を設け、大名のまもるべき規則を示した。

寺社も亦、幕府の統制のもとにおかれた。幕府は寺社奉行をおき、寺社に法度を出して統制した。さらに幕府は、キリスト教禁止の策としてすべての人々をいづれかの寺の檀家とし、宗門改帳を作らせた。これには各家ごとに家族の名、年齢、続柄、出生地、檀那寺とその宗旨などが記載されている。(酒々井町史(一) 四二九P以下参照) その一例を示したが、これはキリスト教禁止により宗旨を調べる



ことが目的である。当時においては、戸籍台帳の役割をなしていた。村役人が保管し、原則として毎年作成させられたものであるが、実際にはその通り実行されるとは限らなかった。この宗門人別帳により家族構成、人口動態が知られる。

「寺社書上帳」は寺社統制の一環であり、領主が寺社の

状況を知るため村役人が寺社責任者などに、調査を求めた報告書である。(酒々井町史料集(二) 一五九P)

(内容の一部)

寺新町 延覚寺	一、浄土真宗 本国下総酒々井町	年五十九 善兵衛
右 右同断	右同断 柏木村	年五十五 房
右同断 酒々井町	右同断 酒々井町	年四十一 智藏
メ六人内 三人男 三人女	右之通拙僧寺之且那二紛無御座候 以上	年三十七 房
新町 浄土宗 (真脱力)		年十四 同
		年八ツ 男子同
		善之助
		延覚寺

酒々井町の寺院

吉祥寺

吉祥寺は本佐倉字根古谷にあり、真言宗智積院末で、山号は佛母山、本尊は麻耶夫人とされている。

佐倉五カ寺の一つであり、古い歴史をもった寺院である。元、文殊寺の本尊十一面観音立像は、室町時代に中央の本格的佛師によって造られたと推定される優れた佛像として、町指定文化財となっている。また江戸時代の信仰によって奉納された小型の絵馬百数十枚が、本堂に納められており、貴重な民俗資料である。境内には佐倉風土記に登載されている伝説の魔三郎石がある。

吉祥寺



この魔三郎石は、昔蒙古の魔三郎が土を練って作ったもので、深く土に埋まり、いくら掘っても掘りきれないとされている珍しい伝説の石である。

木造十一面官能立像 (町指定文化財)

本佐倉 吉祥寺

(像高 七十cm 臂張 十八cm 体奥 十一cm)
室町時代初期(約五百年前)、本格派の正統仏師によって作られたと推定される、一本造りの秀作で特に顔は、観音らしい温顔がよく表現されている。全体の調和がよくとれた見事な作である。

この像は、本佐倉字南大堀にあった文殊寺の本尊仏であったが廃寺になったときに吉祥寺に移されたという。化仏、裳裙その他一部が欠失している。

十一面観音立像



吉祥寺の絵馬

絵馬は江戸時代から明治、大正時代にかけて盛行した信仰形式の一つである。神社や佛閣に願い事のあるとき、願いがかなったとき、そのお礼として奉納された絵額である。絵馬は大きさ一メートル以上もある豪華なものもあるが、

一般には三十センチ前後の簡素なものである。吉祥寺の

絵馬は本堂廊下に百六十余枚奉納されている。四十センチから二十センチぐらいの大きささまざまな絵馬である。吉祥寺の本尊佛母（釈迦の母）摩耶夫人であることから育児の守として尊崇されて、お乳の出ない人達に信仰されて絵馬が奉納されたのであるが、民間信仰のよき資料である。

吉祥寺の絵馬



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

吉祥寺

仏母山吉祥寺は本佐倉字根古谷にあります。佐倉五か寺の一つに数えられた名刹で、真言宗智山派京都智積院に属しています。本尊は麻耶夫人です。

寺伝によると、大同二年(八〇七)弘法大師巡行のおり、鎮護国家のため、麻耶夫人の霊像を当地に納め、修法の由で、御麻耶坊と号したと伝えられています。開基年月は不詳となっています。

延宝九年(一六八一)三月、中興開山、宝運の代に醍醐三寶院末となる。

宝永七年(一七一〇)十二月、常法談林所(学問所)許可となる。

天明三年(一七八三)勘修寺宮住路権僧正宥撰が当時の住職となつてから、菊の御紋章が許可される。

天保十一年(一八四〇)六月五日、火災により伽藍残らず焼失する。

嘉永五年(一八五三)五月、六一世空円の代に檀家の助力によつて本堂を再建する。

文久二年(一八六二)三月、六三世宥貞の代に、庫裏・玄關ともに再建される。

明治四十三年(一九一〇)三月、佐倉本町、常泉院を合併する。

文化財として町指定の木造十一面観音立像と民俗資料の絵馬百数十枚があり、また伝説の魔三郎石が本堂前にあります。

佐倉五か寺の一つで、本佐倉字五良にあつた名刹、文殊寺が、天保四年、廃寺となつて吉祥寺に引き継がれたために、下寺の数は多くあります。

境内面積は一〇七五坪、本堂・庫裏・大師堂・薬師堂などがあります。

木造十一面観音立像

この像は、室町時代初期に本格派の正統仏師によつて造像されたと推定されます。像高は七〇センチメートルの本造りの秀作で、特に顔容は観音らしい温顔がよく表現され全体の調和もよくとれている見事な作です。

この像は、今は廃寺となつてしまつた本佐倉五良にあつた文殊寺の本尊仏で、廃寺となつた際に吉祥寺に引き継がれました。化仏・裳裾、その他の一部が欠損となつていますが、昨年(昭和六十三年)補修されて完全な姿となっています。昭和四十六年、町指定文化財となっています。

吉祥寺の絵馬

絵馬は江戸時代から明治・大正時代に盛行した信仰形式の一つです。神社・仏閣に願いごとのあるとき、あるいは願いごとのかなつたときに、その御札として奉納された絵額です。絵馬の大きさは二、三メートルに及ぶ豪華なもの

もありませんが一般庶民の奉納するものは三〇センチメートル前後のものでした。吉祥寺に奉納されて、本堂廊下上に吊るされている百四十枚の絵馬は、江戸時代から明治・大正時代に奉納された旧形式の絵まで貴重な民俗資料となっています。吉祥寺の本尊は麻耶夫人（仏母）であることから、育児の守りとして尊崇されて、お乳の出ない人達の切実な願いがこめられている絵馬です。

魔三郎石

江戸時代に発刊された『佐倉風土記』に、昔蒙古の魔三郎が土を練って作った石が吉祥寺にあると伝えていますが、この石は

本堂前の植込みの間にある自然石がそうだと伝えていますが、伝説によると、この石は深くて、いくら掘っても掘りきれないといわれています。この石は地上高さ一メートル、幅六〇センチメートルの緑泥片岩で、鎌倉時代から室町時代に盛行した下総式板碑と同質のものでした。この伝説を生んだ背景はなんであったかわかりませんが、面白い伝説です。

大佛頂寺

大佛頂寺は下岩橋字田中にあり、岩橋山と号し、真言宗智山派に属し、佐倉五カ寺の一つである。

寺伝によると、弘法大師が大佛頂の法を修めたところという。天正十九年、徳川家康から寺領十石を与えられており、代々の將軍の御朱印状(写)八通がある。

慶長、宝永、宝暦の三度火災となり、古文書等はないが真言宗の談林(学問所)が設置されていた。

寺宝には「古鐸」がある。この古鐸は中国から伝来したもので通称「舌出しの鈴」といわれ、全長十七・五cm 鈴部高さ九cm 口径十cmあり、三鈷 さんご 鈴に属するもので、

柄部の三方に人面の彫刻があり、動かすとその一方から両眼と舌の飛び出すようになっていた珍しいものである。古鐸は密教の法具として、奈良朝時代に中国から渡来したものが始まりという。この古鐸は毎年二月の御影供の日に公開、拝観をゆるされている。

古鐸

下岩橋 大仏頂寺

全長 十七・五cm 鈴部高さ 九cm 口径 十cm

舌出しの鈴」として古くより著名である。三鈷 さんご 鈴に属するもので柄部の三方に人面が彫刻されて動かすと、その二面より両眼と舌が飛び出すようになっていく。鈴の上部と下部に中国風の文様がついている。累計が少なく珍しいものである。古鐸は密教の法具として奈良朝時代に中国から渡来したものが始まりといわれているが、この古鐸もその時代のもので寺宝となっている。

大佛頂寺古鐸



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

大仏頂寺

岩橋山大仏頂寺は、下岩橋字田中にあります。真言宗智山派、京都智積院に属し、本尊は大日如来です。佐倉五か寺の一つで、中世から既に有力な寺院でした。江戸時代になっても、代々の徳川將軍から御朱印一〇石を与えられていました。

真言宗の談林(学問所)があり、さらに「さんしょう坊」という下寺が付近にあつて、寺格は高かつたようですが、三回も火災に遭つて寺の重宝や古文書など焼失してしまいました。『成田名所図会』によれば、岩橋山成就大仏頂寺と山号・院号・寺号の三号をもつていました。

寺伝によりますと、平城天皇の御宇、大同二年(八〇七)弘法大師が鎮護国家のため、本尊大日如来(大仏頂尊)を当地に納め留まり、三・七日間、大仏頂の祕法を治め、国家安穩・五穀成就・万民豊樂・七難即仏・七祖即生の祈りをこめて開基したとあります。

境内東隅に「弘法の滝」があります。弘法大師の修法水であつたと伝えられ、加治水とも呼ばれ眼病を治し、母乳を増すといわれて多くの人達に信仰されてきました。

大仏頂寺の古鐸

大仏頂寺の寺宝「舌出しの鈴」として古くから伝えられています。三鈷鈴に属するもので、全長一七・五センチメ

ートル、鈴部高さ九センチメートル、口径一〇センチメートルあります。柄部の三面に人面が彫刻されていて、動かすとそのうちの一面から両眼と舌が飛び出すようになってきます。鈴部の上部と下部に中国風の文様がついています。累計が少なく珍しいものです。古鐸は密教の法具として奈良朝時代に中国から渡来したのが始まりと伝えられています。この鈷鐸もその頃のものとして寺宝となっています。なお、この古鐸は毎年二月二十一日の当寺の御影供の祭に一般公開されています。

経胤寺

経胤寺は康治二年（一一四三）千葉常胤の創建で真言宗、常胤寺と称されていたが、大永元年（一五二二）顕本法華宗に改宗し、経胤寺と改称した。

本堂は延宝三年（一六七五）の改築で、江戸時代中期の寺院建築様式をよく表現されている建造物として、町指定文化財となっている。境内には巨石供養塔、宝篋印塔の基等があり、経胤寺の檀徒層の厚さを現わしている。

境内墓地には、明治末期俳誌「朝虹」を発刊し、中央俳壇にまで知られた原田虎月の墓がある。



経胤寺本堂

巨石供養塔及び宝篋印塔

本佐倉 経胤寺境内

一 巨石供養塔 文政五壬午年（一八二二）三月日

棹石高 一一・〇六m 八二・cm角

本堂正面にあり本堂に向って「南無妙法蓮華経」と見事なひげ題目が刻まれている。江戸時代の風格をよく現している刻字である。棹石の巨大なること、まさに偉観である。

二 宝篋印塔 5基

（写真に向って右より）

（一） 高さ 二・三十m 承応四年三月日（一六五五）

（二） 〃 三・三六m 寛文七年未丁七月十三日（一六六七）

（三） 〃 四・四五m 〃 十月日日（一六六七）

（四） 〃 四・八三m 〃 巳酉八月吉日

（五） 〃 四・四五m 〃 巳酉天大吉日

（一六六九）

（一六六九）

（一六六九）

（一六六九）

五基併立、その巨大なること、宝篋印塔として稀である。こうした巨大供養塔を造立した経胤寺の檀徒あるいはその背景はどんなだったろうか、多くの示唆を与えられる。



(写真向って右が供養塔その奥五基が宝篋印塔)

経胤寺本堂 一棟 (町指定文化財)

この本堂は宝形造りトタン葺きのいわゆる「五間堂」で実長は桁行十二・七m、梁間十一・四mの平面をもち、正面に一間の向拝がついている。

基礎は粒石を用い、構造柱の床下は八面取りである。向拝柱(経二十五cm)は几帳取りで構造柱と虹梁こうりょうでつなぎ、本堂周辺に百七十cm巾の回縁をつけ床高は百三cmである。架構の手法には、すぐれた点がみられ、柱(経二十九cm)と三十二cmを縁長押、内法長押、頭貫、台輪で結架し、桁は実肘木つき和様斗拱しきまうで支えている。軒は二軒の繁極である。柱間は背面は壁、側面、正面はガラス戸を入れているが、近年までは板戸であった。内部は桁行筋柱第三線までを外陣とし、ここは前半部を化粧屋根裏、後半部を棹縁天井とし、東西に梁を架け太瓶束を用い、構架技法の巧みさをよく現わしている。内陳は格天井とし、床は板敷きで正面中央、柱筋、第六線に來迎柱を配し須弥壇じゆみだんを設けている。本堂は小屋組及び柱間装置、その他に改補がおこなわれているが、棟札に示されている延宝三年改築当時の構造がよくのこり町内に於ける江戸中期初頭の建築とし

て貴重な一棟である。

解説 日本建築学会員 小川政吉

経胤寺入口



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

経胤寺

経胤寺は本佐倉字西屋上りにあります。山号は如意山、頭本法華宗、京都妙満寺派に属し、本尊は日蓮聖人奠定の大曼荼羅です。

寺伝によると、康治二年（一一四三）千葉介五代常胤の開基で、当所は真言宗、常胤寺と証して、境内周囲の三方に堀を囲らし、面積は約三ヘクタールあって、常胤の砦跡と伝えられています。

室町時代の大永元年（一五二一）法華経に改宗し、江戸時代の元禄年中（一六八八〜一七〇三）佐倉城守戸田山城守忠昌の帰依によって、寺号を経胤寺と改めました。寺領一〇ヘクタールを有し、末寺五か寺、寺内に六坊があり、本堂は間口八間、奥行八間半、庫裏間口七間、奥行一四間、総門（宝暦年間）、鐘楼（宝永六年）、泰師堂間口五間、奥行六間など、大寺としての伽藍が配置されていたといわれており、梵鐘は等身大で重量二〇〇貫（七五〇キログラム）あったと伝えられています。昭和十七年、太平洋戦争中に戦時供出して今はありません。

前記の伽藍も老朽となり、現庫裏再建の際に、本堂以外は整理されました。

本堂は延宝三年（一六七五）建立の棟札があつて、酒々井町最古の木造建造物として、町指定文化財となつていま

す。

なお境内には、巨石供養塔・宝篋印塔五基・幕末のころの寺子屋師匠林田泰次郎の墓・明治時代の俳人、原田虎月の墓があります。

境内面積は二三〇〇坪、境内霊園二〇〇区画などがあり、広い寺院です。

経胤寺本堂

この本堂は宝形造り、トタン葺きの五間堂ですが、実長は桁行七間、梁間六間半の平面をもち、正面に一間の向拝がついています。本堂周辺に一七〇センチメートル幅の廻り縁をもっています。この部分はコンクリートで補強されています。架構の手法はすぐれた点がみられ、柱は檜の丸柱を用い、縁長押・頭貫・台輪で結架し、桁は實肘木つき榎様莖えています。軒は二間の繁極です。内陣は格天井とし、床は板敷きで正面中央、柱筋、第六線に来迎柱を配し、須弥壇を設けてあります。本堂は小屋組その他に多少の改補が行われています。棟札に示されている延宝三年（一六七五）建築当時の構造がよく残されており、均整のとれたよい姿をして、江戸時代中期初頭の建築として貴重であり、昭和五十二年、町の文化財指定をうけています。（日本建築学会員、小川政吉氏談より）

巨石供養塔

経胤寺本堂正面にあつて「南無妙法蓮華経」と見事な髭

題目が刻まれています。江戸時代の風格をよく現わしている刻字です。棹石の巨大なることまさに偉観です。文政五壬午年（一八二二）三月建立。棹石高二・〇六メートル、幅八二センチメートル角。

宝篋印塔（五基）

この宝篋印塔は巨石供養塔の跡に五基併立しています。

写真の向つて右より

- (一) 高さ二・三〇m 承応四年（一六五五）三月日
- (二) 〃三・三六m 寛文丁未（一六六七）七月
- (三) 〃四・四五m 〃（一六六七）十月日
- (四) 〃四・八三m 〃己酉（一六六九）八月吉日
- (五) 〃四・四五m 〃己酉（一六六九）天大吉日

五基併立、その巨大なること宝篋印塔として稀です。こうした巨大な宝篋印塔を造立した経胤寺の檀徒あるいはその背景はどんなであったでしょうか、多くの示唆を与えられます。

林田泰次郎墓

林田泰次郎は上本佐倉字外宿の人で、幕末のころ寺子屋の師匠をしていたことはその墓碑によってわかりますが、詳しいことは伝えられていません。

墓は経胤寺本堂右側の林田家墓地内にあり、子の善次郎と門人によつて建てられたものです。墓石は高さ七五センチメートル、前幅二八センチメートルの角形石で、台石二

段つきとなっています。

正面 秀学院法解日昌信士

裏面 奉読誦法華經七拾部

側面 信士諱常字昌林田氏号圓頓舎又法雨軒

又東莊稱泰次郎南総武射中里人本姓海保

適冒林田受佐倉儒石橋先生善書好插花

国諱安政乙卯歳正月二十四日卒寿五十三

墓本佐倉経胤寺墳地

右の碑文によると泰次郎は武射郡中里（山武郡松尾町）の人で、本姓は海保でしたが、林田氏の養子となり、佐倉の儒者、石橋先生に学び、插花を好み、書に勝れていました。また江戸時代の学者の例にならって、諱、字名の外に円頓舎・法雨軒・東莊などの号をもっていました。門人の数などわかりませんが多才な人であったと推察されます。

東光寺

東光寺は酒々井字横町にあり、真言宗豊山派に属し、佐倉五方寺の一つである。本尊は大日如来で、康元二年（一二五七）知恩院の俊誉上人の開基とされている。境内には町文化財の石佛、大日如来供養塔、正徳元年の庚申塔の二基がある。

なお、明治二十二年（一八八九）年五月七日、酒々井町誕生、第一回の町議会が東光寺本堂で開かれた歴史的な寺院でもある。



大日如来供養塔（町指定文化財）

酒々井 東光寺

高さ 一・三 m 巾 六〇 cm

この碑は舟形光背に大日如来像が彫像されており、寛文二〇年（一六七三）の造立であり、酒々井町石像としては古い部類に属しており、像容が優れ、保存状態もよい。光背部には付近「ケ」町村の名前と人数が刻まれている。中臺村（下台）小神村（尾上）等旧村名が用いられておりこのことによっても歴史史料として貴重である。

光背部銘 寛文十三年癸丑十月十三日

別当東光寺宥秀、右ハ二世安樂也

酒々井町男女七十□人 中臺村男女九人

新橋村男女二十人 新堀男二人

中川村男女七人 上岩橋村二人

小神村一人

大日如来供養塔

以下略



酒々井の庚申塔

(町指定文化財) 酒々井 東光寺

高さ 六十八c m 前巾 三十四c m 側巾 一八c m

この庚申塔は酒々井下り松の新堀入口三叉路附近に在ったが国道21号線工事に際し村人によって東光寺境内に移されたものである。高さ六十八c mの角型で元は笠石附であったが笠石は紛失してない比較的に小型であるが造像がよいこと。造立年代が古いこと。造立者の姓名が多く刻まれており、歴史的に価値あるものとして町指定となる。

背面 正徳元年辛卯十月十五日

櫻齋七、吉田□太夫、別当圓福院

側面 嶋田長右衛門 若林与左衛門

深山長左門(ママ) 大谷吉左門(ママ)

蒔文右衛門 和田勘兵衛

高橋久兵衛 鈴木惣左衛門 外26名

酒々井の庚申塔



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

東光寺

東光寺は朝日神社から南へ二〇〇メートル程行った下台地区との境にあります。山号は大広山。江戸時代は御室仁和寺末となっていました。現在は真言宗豊山派、奈良県長谷寺に属しています。本尊は胎藏界大日如来です。鎌倉時代の創建で、佐倉五か寺の一つに数えられている有力な寺院で多くの下寺と檀信徒を有しています。

寺伝によると鎌倉時代の寛元年中（一二四三〜四七）、京都知恩院の俊誉僧正が関東巡業の時、当所を真言密法の霊地として一寺を建立、諸堂を建造しました。大広山密蔵院東光寺と三号を唱え、客殿・釈迦堂・薬師堂・表門・庫裏などの伽藍が配置されていましたが、元禄年中（一六八八〜一七〇四）、火災に遭って残らず焼失しました。現在の本堂はこの跡に再建されたものと伝えられています。

境内には、幕末の書道家であり、横町附近で寺子屋を開き、多くの門人を養成した高幡南溪の墓と、昭和三十八年、横山紋蔵によって建てられた新四国八十八体記念碑があります。

文化財は待ちして猪の石造大日如来供養塔と石造庚申塔があります。

東光寺が下寺の多い寺で、酒々井町・富里町などに無住寺四か寺、廃寺一四か寺があり、従って多くの檀家があり

ます。

高幡南溪の墓

南溪の墓は本堂前にあります。南溪は本名を貞助といい、著名な書道家として、江戸時代末期に酒々井町横町あたりで寺子屋を開き、多くの塾生を養成したと伝えられています。詳細については知ることができません。わかることは、東光寺に南溪の墓と乳の墓があり、その碑文によるだけです。

南溪の父の墓は本堂前の無縁仏石碑群の中にあり、高さ七〇センチメートル、横幅二八センチメートルの角形で、

正面 高昌院深玄智篤居士

側面 高幡玄徳字子恭号隅川又号龍峽道人、業

医有著述未上、文政八年乙酉九月十三日

病没、享年六十葬子東光寺今仮建此碑

酒々井町 高幡氏

この碑文によると南溪の父は医者であり、学者でも会ったが、文政八年（一八二五）に六十歳で死亡しています。

南溪の墓は本堂前にあり、弟子達によって建立されたものです。台石三段、棹石高さ一・〇五メートル、四四センチメートル角の堂々たるものです。

正面 高幡南溪先生之墓

側面 高幡貞助碑陰記（銘文一八五字省略）

嘉永五年壬子二月 佐倉 平野重久撰

安並好純書

石工 小坂新兵衛

この碑文によると南溪は号で本名は貞助であり、父玄徳は奥州二本松の出身で、母は酒々井町鈴木氏娘であること、医者は好まず学問に志し、書道の達人であり、大酒豪であったが嘉永二年（一八四九）三十九歳で没し、三年後の嘉永五年に門人達が木の葉かを立てたと記されています。台石には建碑に協力した門人達の名一二人が記されています。門人数は酒々井五十三、本佐倉十三、中川九、上岩橋七、柏木三、下岩橋六、大佐倉四、滝沢一、新橋二、尾上二、その他十三か村十五などであり、かなり広い範囲の名があります。

南溪は三十九歳で没しています。多くの門人達によって建碑されていることなどから、大きな影響力を持っていた人物であることが推測されます。

南溪の塾がどこにあったのか、母の生家の鈴木氏とはどこかなどしることはできません。酒々井上宿の八坂神社の幟旗は南溪の書であると伝えられていますが、この幟旗も今は見当たりません。

大日如来供養塔

東光寺本堂前に南溪の墓と向い合って建っています。この供養塔は石造の高さ一・三メートル、幅六〇センチメートルのもので、舟形光背に胎蔵界大日如来像が彫刻されて

いて、寛文十三年（一六七三）の造立です。酒々井町の石仏として古い部に属しています。象容が勝れ、保存状態もよいものです。光背部には附近一七か村の名と人数が記されていて、中台村（下台）・小神村（尾上）などの九村名が用いられています。このことによっても歴史史料として貴重なものであり、勝れた石仏として昭和五十二年、町指定文化財の指定を受けています。

（光背部銘文省略）

酒々井の庚申塔

この庚申塔は元は下り松の新堀入口三又路附近にありましたが、旧五一号線の拡張に際し、東光寺境内の現在地に移されたものです。高さ六八センチメートルの角型で、元は笠付きでしたが、笠石は紛失して今はありません。小型ですが、造像のよいこと、造立者の氏名が多く刻まれていることなどから、歴史的に価値があるものとして、昭和五十二年、町の指定文化財となりました。

銘文 背面 正徳元年辛卯十月十五日 櫻井團

七 吉田口太夫 別当圓福院

側面 島田長右衛門 若林与佐衛門 深

山長左門 大谷吉左門 蒔文右衛

門 鈴木惣左衛門 ほか二十五名

妙胤寺

妙胤寺は本佐倉字猿楽場にあり、日蓮宗中山法華経寺末となつている。はじめ大蛇(佐倉市)にあつた真言宗のお寺であつたが、大蔵坊法印が住職のとき、日祐上人が弘法の



め諸国を回つた際立寄り、三日三晩問答(議論)をして、日祐上人に説き伏せられて日蓮宗に改宗したと伝えられているが、問答に負けたので改宗したというのは話としては面白いが、事実はどううであろうか。日祐上人は中山法華経寺三世の住職で、千葉胤貞の子であり、千葉氏から多くの寺領の寄進をうけてさかんに弘法活動をしていたので、この改宗は政治的な影響があつたとみるべきだろう。

本尊は弥勒菩薩。日蓮宗の大信徒、加藤清正の木像、及び手形があり、「清正公さま」のお寺として知られている。境内には下総式板碑「基、「五年と十年」の編さん者桧垣金太郎の墓がある。

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

妙胤寺

常勝山妙胤寺は本佐倉字猿楽場にあります。日蓮宗法華経寺に属し、本尊は釈迦牟尼仏です。

寺伝によりますと、開山は正安元年(一二九九)日祐上人。創建当所は大蛇村(佐倉市)にあつて、真言宗弥勒院と称していましたが、日蓮宗中山法華経寺三世日祐上人が巡行の途中立寄り、当時の住持であつた大蔵坊法印と三日三晩問答(討論)して、遂に住持が説き伏せられたために、日蓮宗に改宗しました。大蔵坊法印も日祐上人の弟子となり、日乗と改名したと伝えられています。

日祐上人は千葉胤貞の子で、中山法華経寺の住職となりましたが、千葉氏の外護によって多くの寺領の寄進をうけ、経済的基盤ができて弘法活動を盛んにし、法華経寺の教勢を拡張した人です。下総地方は千葉氏の所領下にあつて、妙胤寺の改宗も政治的・経済的な配慮もあつて、前記のような理由をつけて改宗したものと解せられます。

この後、本佐倉城主千葉勝胤の帰依をうけて、千葉氏の祈願所となり、勝胤の「勝」をとつて「常勝山」、「胤」をとつて「妙胤寺」と山号・寺号を改めたと伝えられています。これによって当寺は千葉氏の祈願所となつていたために、檀家の数が少なかったと思われています。

清正公像

妙胤寺は別名「清政公様」ともよばれていました。これは当寺に、日蓮宗の大信徒であつた加藤清正の像が祀られているからです。以前は多くの講中があり、遠近からの参拝者がありました。清正公の木像は等身大より大きく、清正の偉容がよく表現されています。清正の所領地、熊本市本妙寺の「清正公像」の製作者が江戸在住の佐倉出身の仏師であり、その縁によつて、妙胤寺の「清正公像」も製作され、池上本門寺に五〇〇日間安置供養された後、妙胤寺に勧請され、多くの信仰をあつめることになりました。

なお、清正公の手形も寺宝となっています。この手形は和紙に墨で大きな掌が印されたもので、清正公を偲ぶ貴重

なものです。

門石

日蓮宗の寺院の入口には、たいてい「南無妙法蓮華経」のヒゲ題目の門石があります。いずれもそれぞれの特徴をもつたものですが、妙胤寺の門石は巨大なもので、棹石の高さ一・七八メートル、前幅七六センチメートル、台石は三段積みの高さ一メートルで、勝れた文字が刻まれています。建立は享保九年（一七二五）佐倉田町の岡本三郎兵衛・大藤権四郎外九〇余名の寄進によつて建てられました。この門石ははじめ参道入口の左側にありましたが、昭和五十二年に右側の現在地に移されました。その際に門石下の地中から、高さ二七センチメートルの常滑焼の壺が発掘されましたが、これは建立の歳に供養の経文を入れて埋められたものと思われま

す。境内面積は四〇〇坪、本堂・庫裏・上行菩薩堂などがあり、本堂前には下総式板碑一基があります。なお、本堂裏には四囲に土堤と空堀を囲らした城砦跡があります。

浄泉寺

浄泉寺は伊篠にあり、曹洞宗で、延徳二年（一四九〇）当時、この地方の領主であった粟飯原胤光の開基、周恩和尚の開山、初め寺号を周心院と称し、明応 \times 年伽藍を建立したと寺伝にある。胤光は千葉氏の有力な一族であって、千葉氏の猪鼻山城時代から伊篠に城居して、数々の合戦に参加したと伝えられている。

胤光が没し、法号寒翁浄泉居士となり、その子胤信は父の菩薩を弔うため父の法号をとって、浄泉寺と改称したという。このように由緒のある浄泉寺には次のような、県、町指定の文化財がある。

- 1 応永雲板（県指定）
- 2 銅造十二面観音坐像（町指定）
- 3 木造聖観音立像（町指定）
- 4 浄泉寺文書 (一)（町指定）
- 5 浄泉寺文書 (二)（町指定）



銅造如意輪観音坐像 町指定文化財

伊篠 浄泉寺

像高 二十八・五cm 臂張 十七cm
体奥 五cm

浄泉寺開基粟飯原胤光 あいはらたねみつ の守本尊であったと伝えられている銅造りの小柄な像であるが、室町時代の様式がよく表現されている。台座の背面に「妙観禅尼」の銘があり、妙観禅尼は胤光の母であるという。この像は江戸時代に発刊された「成田名所図絵」にも掲載されており、そのころより著名であった。

銅造如意輪観音坐像



木造正観音立像（町指定文化財）

伊篠 浄泉寺

像高 六十六cm 臂張 二十五.五cm

体奥 十四cm

鎌倉時代の様式を模しているが室町時代の作と推定される。裳裙の様式に宋朝風をとり入れた精巧な彫りで顔容もすぐれている見事な彫刻である。浄泉寺境内観音堂に安置されている。



木造正観音立像

応永雲板（町指定文化財）

伊篠 浄泉寺

縦四十八.五cm 横四十四.五cm

浄泉寺開山、周恩和尚が赴任の際持参したものという。雲板は禅宗、天台宗等で合図に使用する青銅製の鳴器である。この雲板は室町時代の作で形姿も勝れている。この種の法具も少ない現在では貴重な存在である。

県指定応永雲板（浄泉寺）

「応永二十二年（1415）乙未十一月日」「下野国那須山大雄禅寺」の銘あり



浄泉寺文書（二通）（町指定文化財）

伊篠 浄泉寺

その1「常輝」は二十代千葉介孝胤。
「栗飯原豊後入道」は浄泉寺の創立者胤光である。



その2

「輪光」は二十一代千葉介勝胤。
「栗飯原右衛門三郎」は、胤光の子胤信であり、「周信院」は後に浄泉寺と改称したのである。



この浄泉寺の古文書二通は、本佐倉城主の千葉氏より浄泉寺の創建者である栗飯原氏に対しての安堵状である。中世文書のきわめて少ない現状の中で、貴重な資料である。

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

浄泉寺

仏樹山浄泉寺は伊篠字辻屋敷にあります。曹洞宗で、本寺は常陸国多賀郡杉室（現日立市）大雄院。本尊は銅造十面観音坐像です。

浄泉寺は千葉氏一族の栗飯原氏の建立したもので、由緒が正しく伝えられ、江戸時代に刊行された『成田名所図会』、明治十六年刊行の『新撰佐倉風土記』などにも詳細に紹介されています。

寺伝によりますと、延徳二年（一四九〇）伊篠に所領のあった栗飯原豊後守（左衛門尉）胤光の開基で、常陸杉室大雄院三世周恩和尚の開山となっています。はじめは周心院と称し、明応四年（一四九五）伽藍を建立したと伝えられています。

胤光は千葉氏の有力な一族で、千葉氏の猪鼻城時代から石の二城居し、数々の合戦に参加しています。胤光が没し、法号寒翁浄泉居士となりました。胤光の子の右衛門三郎胤信は、父の菩提のために胤光の法号をとって、周心院を浄

泉寺と改称したと伝えられています。

境内面積は五五六坪、本堂は昭和五十年、客殿は昭和六十年、庫裏は昭和五十九年、いずれも新築されて面目が一新されています。

鑄銅雲版

雲版は禅宗系の寺院で合図に使用した鳴器です。浄泉寺の雲版は応永二十二年（一四一五）の銘があり、開山の周恩和尚が持参したものと伝えられています。縦五〇・三センチメートル、横四六・五センチメートル、撞座径一一・六センチメートル、撞座は薄肉の鑄出しの蓮花文です。縁はかまぼこ縁で内側に子線を廻らしています。裏は鑄出しの無紋粗地です。吊り穴は二個あります。

銘文は表面中央に「下野国那須栗山大雄禅寺」、右側に「応永二十二年」、左側に「乙未十一月日」とあります。昭和五十三年、県の文化財指定をうけています。

銅造十一面観音坐像

浄泉寺開基、栗飯原胤光の守り本尊であったと伝えられています。銅造り、像高二八・五センチメートル、臂張一七センチメートル、体奥五センチメートルの小がらの像ですが、室町時代の様式が良く表現されています。台座の背面に「妙観禅尼」の銘がありますが、この妙観禅尼とは胤光の母であったと伝えられています。

昭和四十六年、町の指定文化財となっています。

木造正観音立像

浄泉寺の正観音立像は、鎌倉時代の様式を模してしますが、室町時代の作として推定されます。像高六六センチメートル、臂張二五・五センチメートル、体奥一四センチメートル。いかにも観音らしい温顔で、裳裾の様式に宋朝風をとり入れた精巧な彫りで、顔容もすぐれた見事な彫刻です。浄泉寺境内の観音堂に安置されています。

昭和四十六年、町の指定文化財となっています。

浄泉寺文書

当寺この地方の主権者で佐倉（本佐倉）城主であった千葉氏より、浄泉寺の創建者の栗飯原氏に与えられた所領の安堵状で二通あります。

浄泉寺文書（一）の「常輝」は二〇代千葉介孝胤、「栗飯原豊後入道」は開基の胤光の別号です。（二）の「輪覚」は二一代千葉介勝胤であり、「右衛門三郎」は胤光の子胤信の別号です。

この二通の文書の中にある善光寺、下金山、松崎郷神宮寺領、広島寺領は栗飯原氏の所領として安堵状をうけたわけですが、現在ではそれが何処であったかは確認することはできません。栗飯原氏が伊籬のどこに城をもっていたか、千葉氏滅亡後、伊籬の栗飯原氏がどうなったかも不明です。浄泉寺文書に通だけが往時をしのぶものとなっています。昭和四十六年、町の指定文化財となっています。

浄泉寺文書（一）

印東庄伊籬北方村事 栗飯原豊後入道浄泉
任申上旨周心院於被成 菩提所候 次普光寺
二宗比丘尼如毎々可加 扶持候 此儀於子々
孫々不可有相違之状如件

明応四 十一月九日 常輝（花押）

栗飯原豊後入道殿

浄泉寺文書（二）

相守実父左近将監遺 跡下金山松崎郷神宮
寺任先例可令領進是 又不可相違之状如件

永正六年九月二十八日 輪覚（花押）

栗飯原右絵門三郎殿

東伝院

東伝院は墨区大広台にあり、曹洞宗超林寺末で釈迦如来を本尊とし、永正元年（一五〇四）松岩周鶴和尚が創建とあるが、由緒不詳である。

境内に下総式板碑「基と徳富蘇峰詩碑」基がある。この詩碑は、天羽全孝が住職時代の昭和十二年、蘇峰会印旛郡支部によって建碑されたものである。

徳富蘇峰は、明治、大正、昭和初期にわたっての言論界の重鎮であり、また文豪として高名であった。「近世日本国民史」百巻の大著述のほか二百数十冊の著書がある。蘇峰

徳富蘇峰詩碑（東伝院）



東伝院本堂

は文章報国を志し、その論旨は、愛国心を起点として執筆した。蘇峰会印旛支部は、酒々井町を中心に、隣町村の有志百数十名によって結成されていた。

蘇峰の来町は二回、酒々井小学校において講演会を開き、多くの聴衆に感銘を与えている。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

東伝院

前墨から大川戸端を渡った高崎川の東南部の集落が向墨です。向墨の南端、字大広台に東伝院があります。東伝院は馬橋地区と境を接し、本村と離れた地にあります。曹洞宗の寺院で本尊は釈迦牟尼仏です。寺伝によりますと、文明十年（一四六九）十九代千葉介輔胤の創建とありますが、その後長く無住寺となっていました。永正元年（一五〇四）成田市台方の超林寺五世松岩周鶴和尚が開山となつて再建し、寺の末寺となつたと伝えられています。

曹洞宗の寺院は佐倉付近に数か寺ありますが、いずれも戦国期の本佐倉城時代の創建です。このうち最も古いのは超林寺と東伝院です。超林寺も開基は東伝院と同じく文明十年、千葉介輔胤であり、常陸大雄院五世貴田周齋和尚の開山となっています。伊篠の浄泉寺は延徳二年（一四九〇）千葉氏の一族、栗飯原胤光の創建、大佐倉の勝胤寺は二代千葉介勝胤の創建であり、本佐倉光徳院（無住）・佐倉市勝寿寺・勝全寺・東慶寺・隆祥寺の五か寺は勝胤寺の末寺として創建されたもので、千葉氏と有縁のものばかりです。

下総式板碑

境内に下総式板碑一基があります。これは東伝院創建者の供養碑と伝えられています。高さ九九センチメートル、幅六七センチメートルで、表面に梵字キリーク・サ・サク

の三字が刻まれています。これは阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の種子で、三仏を表したものです。年号は不詳です。

この外、境内に徳富蘇峰の詩碑があります。

境内面積一〇一一坪、本堂・庫裏は昭和五十年代に建立されたもので、すべてが新しい感じですが。

徳富蘇峰詩碑

蘇峰詩碑は東伝院の本堂に向つて右側にあります。蘇峰は文豪徳富蘆花の実兄であり、明治から昭和初期にかけての言論化猪の重鎮でした。『近世日本国民史』一〇〇巻、その他二百数十冊の著書を著しています。文章報国を志し、その論旨はすべて愛国心を起点としていました。

昭和十二年、当時東伝院の住職であった天羽全孝、元町長高崎孝吉氏等が發起人となつて「蘇峰会」印旛支部が結成され、その記念として建碑され、同年四月十八日除幕式が行われました。除幕式には蘇峰をはじめ、県知事石原雅二郎外多数の名士や会員が参列し、小学生も日の丸の旗をふつて歓迎するとともに会場に入りました。参列者七〇〇余名、露天商は軒を連ね、馬橋区は蘇峰を迎えるために道路の新設、公会堂の建設までする熱狂ぶりであったといわれています。詩碑の高さ二・〇五メートル、幅九四センチメートルの平石で、表面に詩文、

不遇風雲会、悠然臥草蘆

千秋報国志 著作一編書

修史偶成蘇峰正敬

裏面には建立協力者一六五名の名が刻まれています。蘇峰は翌十三年にも九條侯爵・三浦 環などの名士を伴って来町しています。蘇峰会印旛支部の役員には、支部長天羽全孝・副支部長高崎孝吉、会員は酒々井町・八街町・旧根郷村・和田村その他に分布して一四〇余名でした。

妙楽寺

妙楽寺は上岩橋字打越にあり、日蓮宗中山法華経寺末で、開祖湛風、創建は千葉氏一族、木村加賀守胤綱が天文十三年（一五四四）建立したと伝えられている。この胤綱は、上岩橋の木村氏の祖先であり、駒形神社も建立している。

木村氏祖 **川** によると、木村氏は千葉介勝胤（二十一代）の五男胤祐が岩橋に居住し加賀守を名乗り、岩橋殿と称されており、里見氏と北條氏の国府台合戦にも、北條方として参加して戦功があった。その子勝重も千葉介昌胤に仕え、多くの合戦に参加した。以後、代々本佐倉城主である千葉氏に仕えた。

妙楽寺本堂



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

妙楽寺

常清山妙楽寺は上岩橋字宝作にあります。日蓮宗中山法華経寺に属して、本尊は日蓮上人奠定の大曼荼羅です。

寺伝によりますと、開基は天文十二年甲辰年（一五四四）千葉利胤公（本佐倉城主）御一家、木村出雲守胤重の息男、加賀守胤綱で、開山は中山法華経寺大梵^①世日な

つ梵止^②中曲法華経寺の外護者であった千葉氏の出身と考えられ、一〇歳で法華経寺の貫主となったほどの名門の出でした。北條氏政の帰依をうけ、当時衰退していた法華経寺に活力を与え、多くの実績をあげたと伝え^③胤太は永正^④干（法華経寺歴世譜）。日年（一五二六）生れで、妙楽寺開山当時は三〇歳の頃となります。

二世は大乗院日清上人であり、木村胤重の舎弟とありますので、創健者木村胤綱の叔父にあたります。二世の日清上人が実質上の開祖であったと思われま。創建者の胤重も^⑤隴山の日 人も二世日清上人もみな千葉氏に深いかかわりをもった人々です。これによって、当寺は千葉氏の外護によって創建された寺院であると推定されます。

寺院は台地の中腹に位置し、本堂・客殿・庫裏・七面堂・鬼子母神堂などがあります。参道入口には宗祖五百五十遠忌に建てられたヒゲ題目の門石があります。

七面堂は本堂の左側から数十段の石段を登ったところにあります。大正から昭和初期までは、九月十九日の七面山の縁日には、付近町村からの参詣人が多くありました。参詣人には七面のお顔がかかれた半紙分大のお札が授けられ、受けた人は家の入口などに貼って魔除けとしましたが、現在では見受けることが少なくなりました。

妙楽寺の鐘楼堂は七面堂に登る途中にあつて、梵鐘が吊るされていましたが、昭和十七年、戦時供出されて今はありません。梵鐘と一緒に供出された半鐘は錆つぶしをまぬがれて、亀戸の古物商から買戻されて、今は本堂の廊下に吊るされています（銘文は『酒々井町史』下巻四六一頁参照）。

妙楽寺境内には寺子屋の師匠であつた津田左門の墓と住職日涌の墓があります。両方とも弟子達によって建てられたものです。左門の墓は境内右側中段の石らんとくの中にあり、日涌の墓は本堂左側にあります。

清光寺

清光寺は上本佐倉にあり、浄土宗智恩院末である。弘治二年（一五五六）月峯上人の開山と伝えられている。本尊は、銅造阿弥陀如来立像及び両脇侍立像で、善光寺式三尊佛といわれる型式のもので、主尊の背面に正安二年（一三〇〇）の紀年銘その他が刻まれている。この佛像は清光寺の創建よりも二五六年も古いものであり、どのような理由で清光寺の本尊となったかは不明である。

昭和十年、この種の佛像の代表作として、国の重要美術品の指定をうけている。

境内には、徳川家康の父広忠の歯骨墓がある。代目住職の峰蒼無算和尚が、三河国にて修行中分骨を願って持参、清光寺に墓をつくったといわれている。

清光寺は、この墓があったために徳川幕府から、寺領五十石を与えられ、徳川氏の庇護をうけていた。

歯骨墓は本堂の左側にあり、家康の手植と伝えられる厚朴（ほう）の木の何代目かがある。



清光寺

銅造阿彌陀如来及び兩脇待立像

(国指定重要美術品)

本佐倉 清光寺

中尊 像高 五.五^〇 兩脇待 像高 三十三.三^〇

この仏像は善光寺式三尊仏といわれる形式のものである。鎌倉時代から室町時代にかけて、浄土宗の布教とともに同宗の本尊として全国的に信仰されてきたものである。清光寺の三尊仏は造像紀年が明らかであること、鑄上り像容が美しいこと、胴太く、手が小さい等、特徴をよく表し三尊仏の代表作とされて国指定となった。中尊の背面に正安^二年(千三百)九月日、その他の銘がある。



清光寺三尊佛

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

清光寺

亀沢山清光寺は上本佐倉字清光寺作にあります。浄土宗知恩院に属し、本尊は阿弥陀如来です。徳川家康の父、広忠の分骨墓（一説には歯骨墓）があるため、徳川家より御朱印五〇石を与えられていた寺として知られています。

清光寺の開山は室町時代末期の弘治二年（一五五六）、月峰上人と伝えられています。二世となった峰誉無算和尚は三河国大樹寺九世鎮誉の弟子でしたが、この時に徳川家康の父、広忠の知遇を得ており、広忠が死去、火葬の際に分骨を拝請護持して諸国遍歴の末に清光寺の住職となり、分骨を境内に葬って霊廟としていました。天正十九年（一五九一）十一月、家康が東金に鷹狩りに来た際に、無算和尚は家康を訪ね、成烈院（広忠の諡号）の分骨を安置してあることを伝えました。家康は翌日予定を変更して清光寺に来て、霊廟を参拝し子孫長久を祈り厚朴の木を植え、供養料として高五〇石の田畑を寄進、御朱印寺としたと伝えられています（『印旛郡誌』『町史料集』（五）二九五）。

慶長年中（一五九六〜一六一五年）土井利勝が佐倉城主であった時、上意によって玉垣を造営し、表・裏門へ下馬札を建てる。

天和年中（一六八一〜八四）十二世信誉和尚の代、佐倉城主、大久保加賀守忠朝によって本堂が建立される。

元文元年（一七四〇）十月、佐倉城守、松平左近監乗邑が玉垣を修復し、石灯籠二基を寄進しました。

代々の佐倉城主は修復に意を用いていたことなどが記録されています。

境内墓地には、明治初期まで酒々井で寺子屋の師匠をしていた青樹銅石井平兵衛の墓と、明治・大正時代に警察関係の要職を歴任して従四位勲四等を受け、また歌人としても知られた藤崎虎二の墓があります。

梵鐘の供出

清光寺には大きな梵鐘がありました。鐘楼堂は本堂の前にあつたといわれ、この梵鐘は、昭和十七年二月、太平洋戦争の最中に戦時供出されて、今は写真が残されているだけで、その製造年月、銘文なども不明です。

清光寺の境内面積は一三七五坪あり、そこに本堂・庫裏・閻魔堂などがあつて大寺の風格をそなえています。

文化財としては、銅造阿弥陀如来像及び両脇侍立像があります。

銅造阿弥陀如来像及び両脇侍立像

銅造、鍍金のいわゆる善光寺式三尊像で、像高は中尊の阿弥陀如来が四七・九センチメートル、左脇侍の観音像が三五・一センチメートル、右脇侍の勢至像が三五・三センチメートルです。鑄造技法、表現は簡素で、いずれものどかな顔立ちで、中尊ではへら書きの螺髪はまばらで大きい。

阿弥陀如来には正安二年（一三〇〇）の造立年と願守および結縁者、左脇侍には願守と結縁者名と思われる名が刻まれていて、鎌倉時代の善光寺式三尊仏の普及のさまを知ることのできる貴重な例です。昭和五十六年、県の指定文化財となりました。

中尊の背面にある願主銘

橘氏女橘 願主光念菅原阿定阿道阿

平氏頼阿

範并妙円盛助宗

同氏生阿

同氏

行阿来阿

正安二年九月日 願阿 道円 法阿 モア

道阿

観音像背面

順阿 沙 西心 平氏女

青樹堂石井平兵衛墓

石井平兵衛は酒々井下宿の住人で、幕末から明治初期にかけて私塾を開き近隣に名声があり、多くの子弟が入りました。平兵衛は文化三年（一八〇六）七月、屋号「常陸屋」という商家に生まれましたが学問好きのため、当時江戸で仕立業をしながら塾を開いていた近江屋権之丞に師事し、学問と仕立業（足袋・股引など）を習得した後、酒々井に帰り、仕立業のかたわら寺子屋を開きました（石井家

伝）。

後年、塾生が多くなると、宅地内の観乘院（廃寺）後付近に二階建ての塾舎をつくり、教室として弟子の要請に専念しました。塾生は付近町村からの入門者で、延べ三〇〇余人に達したといえます。明治五年（一八七二）の入門者は男五〇人、女三〇人でした。

平兵衛は明治十一年、七十三歳で没しましたが、生前の明治四年九月、平兵衛の徳を慕う弟子中によって墓が造られました。この墓は頌徳碑の意義をもって、酒々井の勝蔵院境内に建てられたのですが、数年前、石井家の墓地である清光寺墓地に移されました。

墓は台石四段積み、棹石の高さ一・一メートル、前幅四五・五メートル、横幅四三センチメートルの巨大なもので、正面に「青樹堂石井平兵衛翁之墓」、横面に一七〇余字の碑文が刻まれて、台石上段正面に「弟子中」の文字があり、二段目台石三方に、門弟二〇三人の名が刻まれています。

（碑文省略）

明治四年辛未秋九月

続 豊徳撰

宮崎重賢書

勝蔵院

酒々井字馬場にある勝蔵院は、現在無住寺となつて吉祥寺の管理となつているが、酒々井町の歴史で重要な役割を果たしてきた由緒ある寺である。

勝蔵院はもと、東台(中央台団地内)にあつたが、元禄十



二年、時の佐倉城主戸田能登守の篤い信仰心によつて、現在地に寄進建立されたものである。

この勝蔵院は、江戸時代には境内も広く、庫裏もあり佐倉七牧の捕馬で、江戸役人や野馬奉行綿貫夏右衛門が来町の際にはその宿舎となつて、幕府より手当もうけている。江戸時代の酒々井町の中心でもあり、いろいろの行事などはこの勝蔵院が中心で催されていたという。

赤塗りの本堂は、江戸時代の建築様式を伝えている建造物として、町文化財の指定をうけ、本尊の木造不動明王坐像も江戸時代の作ではあるが、酒々井町の繁栄の歴史を語るものとして町指定となつている。

木造不動明王坐像 (町指定文化財)

像高 百三〇cm

江戸時代初期に江戸の仏師によつて造像された寄せ木作りの大作で、堀田上野介の寄進とも伝えられている。酒々井宿の繁盛時代の製作と思われる、酒々井宿の諸行事は、この不動堂が中心となつて行なわれたという歴史的な意義も大きい像である。

木造不動明王坐像



勝蔵院本堂 一棟 (町指定文化財)

酒々井字馬場 宗教法人 吉祥寺

本堂は宝形造り、トタン葺きの「三間堂」で実長は桁行六・七一m、梁間六・七二mの平面をもち、一間の向拝がつく。向拝柱にかかる水引虹梁には臺股が置かれ、木階は三級である。構造柱は上部を粽づくりとし、床下は八面取りである。床高は八八cm、回縁は巾一一七cmにつきり、和様高欄がついている。構造柱は縁長押、長押、頭貫、台輪で結架され、柱上は簡素な斗栱で軒桁を支え、軒は一軒で半繁極である。柱間装置は正面と側面は土塀囲いとなっている。内法は一六四cmである。内部は桁行の柱筋第二線を境いとして、内、外陣に分れ、いずれも天井は棹縁天井とし、中央正面のみ板床とし、他は畳敷きとなっている。来迎柱は柱筋第三線より六八cm後方の位置に建てられ、その後背部に須弥壇が設けられている。この本堂には、元禄十二年の棟札があり、構架の手法、構造材の風蝕度、損壊状況等からみて、元禄年間の改築と観られ町内では数少ない古建築として貴重である。

解説 日本建築学会員 小川 政吉

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

勝蔵院

酒々井中宿と下宿の境、津田屋酒店の脇を入ると勝蔵院の赤塗りの仁王門につき当たります。勝蔵院は酒々井の不動さまとして繁昌したと伝えられています。本佐倉字五良にあった古刹、文殊寺の下寺でしたが、天保地代に文殊寺が廃寺となったので、現在は真言宗吉祥寺末の無住寺となっています。

『印旛郡誌』によりますと、不動堂は元は東台（現中央台三丁目付近）にありましたが、元禄年中、佐倉城主戸田山城守の夫人が難病にかかり、医薬の利きめがなく困っているとき、酒々井野不動尊に祈願すれば癒るといふ霊夢によって、東台にあったささやかな不動堂を探し当て、字馬場の現在地に移し、衆僧によって祈願、十七日になったこととたちまち平癒した、よって山城守が帰依して不動堂を建立寄進したとあります。

十数年前に発見された深山武男家文書には、さらに詳しく、具体的に記されています。これによると、戸田能登守（山城守の子）が元禄十二年に、不動の外に客殿・鐘楼堂・仁王門などを突貫工事によって造らせたことになっていきます。現不動堂はそのときに建立されたものであり、江戸時代の建築様式を伝えるものとして、町文化財に指定されています。

なお本尊の不動明王坐像も江戸時代酒々井宿繁栄時代の作として町文化財の指定をうけています。

勝蔵院は境内も広く、現在の酒々井中央保育所・社会福祉協議会なども境内地の一部でした。明治三年の「吉祥寺寺籍取調帳」（『町史料集』（一））によりますと次のように記されています。

一本尊不動明王

一 田畑無御座候

一 境内八百四十坪

一 減罪檀家三軒 同寺門徒

同国同郡酒々井村 處宝山勝蔵院住持法全印

檀家の三軒は少ないですが、これは佐倉城主が建立した寺院のため一般檀家は少なかったものと思われまふ。

長い間無住となつていますが、境内には銀杏の大木が二本ある外に大師堂・庫裏・西国三十二所供養塔・六地藏・狗犬・灯籠などが揃つていて歴史の古さを物語っています。

木造不動明王坐像

勝蔵院の本尊である不動明王坐像は、江戸時代初期のころ、江戸の仏師によって造像されました。木造の像高は一・三メートルの大作で、佐倉城主掘った上野介正信の寄進によるものと伝えられています（『古今佐倉真佐子』）。勝蔵院は前記のように元は東台にありましたが、元禄十二年（一六九九）、佐倉藩主戸田能登守忠真の篤い信仰によって現在地

に伽藍が建立されたもので、不動明王の造像はこれより数十年早いこととなります。『古今佐倉真佐子』には、江戸の仏師が同時に依頼された武田信玄像の首と間違つて取りつけた逸話が載っていますが、その真偽はわかりません。この仏像は寄せ木造りの大作で江戸時代の様式がよく表現された力感あふれている作であり、昭和四十六年に町指定文化財となっています。

勝蔵院本堂

本堂は宝形造り、トタン葺きの「三間堂」で、元は萱葺きでしたが、戦後トタン葺きとしました。元禄十二年の棟札があるので、その時代の建立と見られ、当時の構造がよく表現されています。姿形も勝れていて町内では数少ない古建築として、昭和五十二年、町の文化財指定をうけています。

梵鐘の戦時供出

梵鐘は寺院のつきものといわれるほど、大きな寺院には必ずありました。酒々井町で梵鐘のあった寺院は、経胤寺・清光寺・妙楽寺・勝蔵院の四か寺でした。

梵鐘は鐘楼堂に吊るされ、時の鐘として、明け六ツ（午前六時）、午の刻（十二時）、暮れ六ツ（午後六時）に主として打ち鳴らされ、独特の音律が村々に響きわたり、野に働く人々に時を知らせるとともに、安心感と詩情を伝えるものとなっていました。

昭和六年九月、満州事変が勃発し、さらに日中戦争・大東亜戦争・世界大戦にまで発展して、日本国内の仏師が極度に欠乏した中で、戦争継続のために戦時供出が行われるようになりました。

課程の金物から神仏具に至るまでその対象となり、梵鐘も供出されることになりました。慶長（一五九六〜一六一〇年）以前のもの、特別の由緒あるもの以外は全部供出されることになりました。酒々井町で梵鐘の供出されたのは、昭和十七年（一九四二）二月ごろでした。

供出されることになった経胤寺の梵鐘は重量二〇〇貫（七五〇キログラム）等身大であったと伝えられていますが高さ・直径・銘文残念ながら記録されていません。

清光寺は梵鐘と半鐘の二個が供出された写真が残されていますが、法量・銘文等は不明です。

妙楽寺も梵鐘と半鐘の二個が供出されましたが、半鐘の方は戦後、東京の亀戸の古物商から連絡があり、買い戻されて、現在本堂の廊下に吊るされています。（銘文省略、『酒々井町史』下巻四六一頁参照）。

勝蔵院の梵鐘もこのときに供出されて、法量などは不明ですが、銘文は『印旛郡誌』下巻「處宝山不動堂」の項に「境内梵鐘あり天保度の再鑄に係る銘に云く」として次の銘文が誌されています。

九乳梵鐘 電捲雷轟 麗法雨幽 空際水浴
天白地行 膝潛顎向 長矚汎 万歳楽
伏願乞
天長地久 聖明安穩 有縁無縁 一切霊等
皆成佛道 雨際風順 有穀豊登 十方檀那
除災興業 寺内安全 興隆諸法 廣作佛事

寶珠院 東光寺

本山文殊寺 處寶山勝蔵院 知鏡代

天保十二年辛巳年六月吉日

この銘文が『印旛郡誌』に記載されていたことにより、
滅失した四個の梵鐘のうち一個だけ銘文が後世まで伝えら
れることになりました。

長勝寺

今は廃寺となってその名前も知っている人は少ないが、本佐倉町に長勝寺があった記録が残されている。

このお寺は、松戸市本土寺(法華宗)の末寺で、客殿、庫裏、門などの揃った由緒のあるお寺であった。(町史料集(一)P 一六四) 江戸時代に発刊された成田参詣記という木版本に、この長勝寺の鰐口の絵図が載っていることから長勝寺が本佐倉町にあったことは、一部の人達に知られていたのであるが、その場所などは確認されていない。上本

長勝寺鰐口(東京国立博物館蔵)



佐倉字上宿に長勝寺畑といわれる土地があるので、その附近に長勝寺があったものと考えられる。

長勝寺の鰐口は表に「下総国松澤大権現鰐口也、当社大工聖浄金福徳二年辛亥八月日」裏に「下総国佐倉長勝寺鰐口、天文二十辛亥六月廿六日、大檀那吉岡源左衛門尉求之」の追刻銘がある。

この銘文により、天文二十年(一五五二)には本佐倉地方は佐倉の地名であったことが証明され、さらに金石文で佐倉の地名が使用されている最古のものであり、歴史的にも文化財としても貴重な存在である。

松沢大権現から長勝寺に移り、さらに香取秀真の所有となり、現在は東京国立博物館に寄贈されて同館に所蔵されているが、その移籍の事情については知ることができない。

松雲寺

伊篠大畑七一九

浄泉寺の末寺とされています、浄泉寺の尼寺とも伝わります。小さなお堂に阿弥陀如来坐像と十二神将が安置されています、阿弥陀如来坐像、十二神将とも室町時代前期ころの作とされています。

木造十二神将立像

鎌倉時代の様式を模しているが室町時代の作と思われる。仏師の作ではなく、修験道の行者が信仰心によって彫ったもののようなのである。型にとられない豊かな表情をもっているよい作品である。



木造十二神将立像

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

松雲寺と仏像

松雲寺は伊篠字大畑にあります。曹洞宗浄泉寺の末寺でしたが、廃寺となって久しく、くわしいことは不明です。浄泉寺の尼寺であったとの伝承もあります。

境内には昭和六十二年に再建されたお堂と大師堂があるだけです。お堂には本尊の阿弥陀如来坐像と十二世将像が安置されています。

本尊の阿弥陀如来坐像は破損が甚だしかったのですが、最近の調査で、鎌倉時代の優れた像であることがわかり、両手・台座等が補足修理されて安置されています。この阿弥陀如来坐像は町指定文化財の候補となっています。

新光寺

新光寺 柏木谷津台 562 真言宗、大仏頂寺末寺、本尊は大日如来、開基は不明、境内入り口に宝曆三（1753）年銘の六地藏があります。境内の奥に聖徳太子像と伝わる室町時代後期の童子像が祭られています。



柏木の庚申塔（町指定文化財）

柏木 新光寺

高さ 八八cm 巾 四三cm

この庚申塔は江戸中期の正徳二年（一七一二）に柏木村中によって建立されたものである。庚申塔の造立は江戸時代庶民の生活がやや安定してきた正徳、享保年間以降が多い。町内庚申塔の数多くの中でこの庚申塔は造像が勝れており、持物その他の構図等が基準にかなっていることにより町指定となったものである。

銘文 正徳二年辛辰四月吉日 施主村中



柏木の庚申塔

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

新光寺

新光寺は柏木字谷津台にあります。真言宗大仏頂寺の末寺です。本尊は聖徳太子となっています。新光寺は江戸末期ごろ廃寺となって詳しいことはわかりません。一切は大仏頂寺に編入されています。現在は太子堂三坪、お堂一二坪余りがあり、地元の檀家によって管理されています。本尊の聖徳太子像は、三三年忌ごとに御開帳となる祕仏ですが、現在はやや緩和されています。

新光寺境内は山の中腹に二段となっていて、太子堂は高い石段を登ったところ、古い石仏と両墓制の石らん塔群に囲まれています。

石段の登り口、右側には宝暦三年（一七五三）造立の六地藏があります。この六地藏は丸彫りで損傷もなく、勝れたもので、当町六地藏中随一のもので、町文化財指定の候補となっています。

左に入ったところにお堂があり、お堂の前には待ちして文化財の庚申塔があります。

木造童子立像

この像は、新光寺に祕仏として伝えられている像で、像高は七一・〇センチメートルです、堂に遺る墨書銘札によりますと、江戸時代の天明二年（一七八二）には聖徳太子像とされていたようです。頭髪を角髪に結び（現在欠失）、

袍の上に袈裟を懸けた童子形ですから、そのように考えられたのでしょうか。聖徳太子が一六歳の時、父、用明天皇の病氣平癒を祈る姿を写したという孝養太子像は、同じような姿に造られますが、両手で柄香炉を持っているのが特徴です。この新光寺像は、両手で箱を捧げ持っており、この形の童子像を探すと、毘沙門天の眷属として造顕される善膩師童子の像があります。ただしこちらは普通袈裟を懸けていません。童子像として外に、文殊菩薩の眷属として造られることの多い善財童子の像もありますが、これは上半身が裸体の上に天衣をまとい、合掌しての歩行の姿です。つまり本像はどれとも特定できないのですが、可能性としてはもつとも善膩師童子像が考えられます。

やや寸のつまった丸味のある体軀、ふっくらとした肉付きで小ぶりで愛らしい目鼻立ちの面貌など、童子らしい表現にまことに巧みなものがあります。鎌倉期までの、どこかに超人的な協調を加味した写真とは異なり、近世の人物に近い世俗的な趣の強い作品です。衣褶の彫り口なども説明的で、彫刻としての面白味は少ない。製作時期を限定することは難しいですが、およそ室町時代後半から桃山期頃としておきます。その頃となれば、あるいは聖徳太子孝養像をこのようにあやまることも考えられます。しかし、このことについては外に裏付け資料等が発見されるまで、結論は保留すべきでしょう。（田辺三郎助先生説より）。

柏木の庚申塔

この庚申塔は柏木新光寺のお堂前にあります。像高は八八センチメートルで、江戸時代中期の正徳二年（一七一二）に柏木村中によつて造立されたものです。庚申塔の造立は、江戸時代庶民の生活が安定してきた正徳・享保時代が多く、町内に数多くある庚申塔の中でも、この庚申塔は造像が優れていて、持物その他構図など基準にかなっていることにより、昭和五十二年、町文化財の指定をうけました。

銘文 正徳二年辛辰四月吉日 施主村中

光徳院跡

本佐倉寺坂九五六・二

大佐倉にある曹洞宗勝胤寺の末寺、かつては大きな寺であったと伝わる。本佐倉城内にあり千葉氏所縁の寺。

光徳院跡



酒々井地蔵院

酒々井仲宿一八一五

真言宗東光寺の末寺と伝わる。本尊は延命地蔵、延宝二年に水戸黄門が宿泊している。今は地蔵堂だけが残る。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

地名と地蔵院

横町から引き返して、元郵便局前から佐倉方面に向かったあたりが中宿で、酒々井野中心地でした。延宝二年（一六七四）、黄門水戸光圀が史料採訪のため、房総を旅した日記に『甲寅紀行』というのがあります。この日記の四月二十六日のくだりに「中川より西の方に印旛浦を望み見る。既にして晡時に酒々井村に到る。松平和泉乗久領分なり。和泉守、地蔵院といふ一寺を営みて旅館となす。茶酒の什器等を備ふ。この村は東照宮始めて取立給ふ町なりと云ふ。末々まで繁昌すべき由を権臣に命じて文状を賜ふ。文字は酒々井と書きて、仮名はすするとあるなり。（以下略）」右の光圀の日記には三つの興味あることが記されています。

(一) 東照宮取立の町であること

(二) 酒々井の地名

(三) 地蔵院という旅館

(一)の東照宮（徳川家康）取立説は本稿の始めにも触れて置いた「佐倉御城記」という古文書には次のように記されています。「天正十九年辛卯酒々井町建。御入国始メテ取立之町ニ候故末栄候ニ仕ル可ク旨、御両所様ヨリ大久保十兵衛殿へ仰付ケラレ、酒々井町篠田大隅其外年寄共へ下サレ候證文状有之。（以下略）」この文中の五兩

所様とは家康・秀忠であり、大久保十兵衛は最初の代官と解せられます。

なしです。

酒々井町は千葉氏（本佐倉城主）時代は城下町で、千葉氏の重臣が多く居住していたので、千葉氏滅亡後の混乱を防ぐための終戦処理として、家康は酒々井町を取立てて宿場にしたたり、野馬会所を置くなどしたものと思われます。

（二）の酒々井の地名ですが、興味ある問題です。『大日本史』を編さんした光圀が酒々井と書いて「すすゐ」とあるなりとっているのだから間違いないと思われます。それでは「すすゐ」がいつ「しすゐ」となったのでしょうか。酒々井の地名の大きな謎です。

（三）の地藏院という旅館を兼ねたお寺はどこにあったのでしょうか。今となると、このお寺もまぼろしのお寺です。中宿の農協前から横町うらに抜ける細い道があります。そこを入ったところに現在小さな地藏堂が建っています。その付近にお寺があったという説もありますが、確かな史料はありません。佐倉城主の経営したお寺兼旅館が、いっどうして消えてしまったか、これも謎に包まれています。ちなみに松平乗久が佐倉城主であった期間は、寛文元年（一六六一）から延宝六年までの一七年間でした。松平氏転封して三〇〇余年、遠い昔となりました。水戸光圀の遺してくれた旅日記による酒々井の昔ば

酒々井円福院

酒々井内方一三七・一

酒々井山円福院神宮寺、真言宗吉祥寺末寺、本尊は阿弥陀如来と伝わる、現在、建物は無い。室町時代には存在していた寺で江戸時代後期まで住職がいた。酒々井宿の麻賀多神社を支配していた神宮寺である。境内に「酒の井の碑」が所在する。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

酒の井

酒々井の地名のもとになったという孝子伝説の「酒の井」は、下宿の円福院の境内にあります。円福院は中宿から三〇〇メートルほど北に行って、路地を左へ入ったところにあります。

真言宗吉祥寺の末寺で、本尊は阿弥陀如来です。麻賀多神社の別当でもありましたが、無住となって久しいために、荒れ果てた感が漂っています。酒の井の碑の高さ一メートル、幅六七センチメートルの自然石です。伝説ばやりとなり、ラジオや雑誌などで度々報ぜられたので、町でも環境整備に意を用い、ある程度はよくなりましたが、まだまだ不十分の感があります。この酒の井の碑は、通称、下総式板碑といわれているもので、室町時代に盛行した供養碑です。拓本をとってみると蓮華台坐に梵字キリク（阿弥陀如来の種子字）が刻まれています。酒の井と供養碑とが、どんな関係で結びついたものか今は誰もわかりません。

酒々井東城寺

酒々井内方一三八

梅勝山城東寺、真言宗吉祥寺末寺、本尊は薬師如来と伝わる、現在は小さなお堂だけが残る。「勝」の文字と「城の東」に位置することから本佐倉城所縁の寺である。



上岩橋長福寺

上岩橋西井戸 一六六四

阿弥陀山長福寺、真言宗智山派大仏頂寺の末寺。本尊は阿弥陀如来。かつては三間四面の阿弥陀堂・客殿・庫裏があったといえます。本尊の阿弥陀如来は平安時代末期（十二世紀）の作で下総地方における阿弥陀仏の好例です。また脇侍仏の木造持国天は平安時代末期（十二世紀）・多聞天立像は鎌倉時代（十三世紀後半）の作とされ、三体とも昭和四十六年に県の指定文化財となっています。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

長福寺

阿弥陀山長福寺は上岩橋字西井戸にあります。真言宗大仏頂寺の末寺で、本尊は阿弥陀如来です。神仏混交時代は菊賀神社の別当寺となっていました。現在は無住寺となっています。『印旛郡誌』によれば、開基は延宝六年（一六七八）五月、権大僧都宥誓となっていますが、慶長九年（一六〇四）の「上岩橋郷御繩打水帳」（『酒々井町史料集』（一六））に長福寺の田畑が一四筆、一町八畝四歩の記載があること、本尊の阿弥陀如来が平安時代の作であることなどから平安時代の創建であると考えられます。

享保八年（一七二二）の「上岩橋村寺社書上帳」（『町史料集』（二）六五）には長六間半、横四間の庫裏、三間四面の阿弥陀堂、四反五畝歩の境内地が記されており、また寛政二年（一七六九）の『窪倉藩年寄部屋日記』には、

一上岩橋村名主、組頭共より以書付相達候、当村真言宗長福寺今昼九ツ時（二二時）二出火、寺客殿長七間横五間、庫裏長六間横三間半、阿弥陀堂壱軒但三間四面寺中焼失仕候

とあり、以上三つの史料から見て古い寺院であり、江戸時代には大きな寺院であったことがわかります。

この火災で本尊の阿弥陀如来、脇持の持国天・多聞天が焼失をのがれて救出されたことは幸でした。

尾上延命寺

尾上台畑四九八

稻荷山薬師院延命寺 真言宗、文殊寺末。本尊は十一面観音、江戸時代の末期には廃寺となったという。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

平安仏の造立

酒々井町に平安時代からあった地名は、岩橋と尾上であることは前記のとおりですが、この両地区から平安時代の仏像が発見されたことはまことに奇しき縁と思われれます。

尾上字御手洗に今は廃寺となつて跡形も残っていませんが、延命寺という寺院がありました。この延命寺の隣地の京増恒男家の邸内の土中から鑄銅造りの如来像が発見されました。像高は五・六七センチメートルと小型ですが、この像は調査の結果、平安時代の作とわかり、話題となっています。

尾上正福院

尾上馬場三五九

揚柳山正福院観音寺、真言宗、東光寺末。かつては佐倉牧士の京増健右衛門の寄進による本堂、庫裏、仁王門、鐘楼堂があったと伝えられます。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

正福院

正福院は字馬場にあり、真言宗東光寺の末寺で、現在は無住寺となっています。境内は本堂兼庫裏、大師堂の外に尾上青年館が同居しています。

揚柳山観音寺という山号・寺号をもち、本尊は大日如来です。

「宗教法人台帳」には、本堂三五坪、庫裏一五坪、などが記されており、大きな寺院でした。旧本堂・仁王門・鐘楼堂などがあって、これは佐倉牧士、京増健右衛門の寄進であったと伝えられていますが、火災にあって一切が焼失してくわしいことは不明です。

参道入口付近の空地には、三基の供養塔があります。右側のものは天明四年（一七八四）の造立出、表面に「キヤカラバア」の五輪塔に用いる梵寺、側面には「弘法大師九百五十年遠忌」とあり、台石には揚柳山の山号が彫られています。これと並んで笠付六角形六地藏があります。造立は嘉永三年（一八五〇）で石質は勝っていますが、全部の顔がこわされています。左側には寛政九年（一七六七）造立の観音経千部供養碑があり、「観音寺」の寺号が彫られています。

本堂裏山の墓地には、六地藏の他に、佐倉三牧方牧士、京増嘉右衛門・喜左衛門・健右衛門の墓と歌人京増春樹の墓・小沢定平の墓などがあります。

飯積泉福寺

飯積西ノ前二五九

和泉山泉福寺、酒々井区にある真言宗東光寺末寺、本尊は阿弥陀如来。江戸後期にあたる文化三（一八〇六）年に開基されたと伝わりますが、境内には江戸時代前期の石仏が見受けられません。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

泉福寺

和泉山泉福寺は飯積字西ノ前にあり、真言宗豊山派東光寺の末寺となっています。本尊は阿弥陀如来です。文化三年（一八〇三）の開基と伝えられていますが、境内墓地にはこれよりも古い天和元年（一六八二）の石仏があること、武蔵式青石板碑のあったことから、創建は中世以前であり、文化参年の開基とあるのは再建の誤りと考えられます。江戸時代後期までは住職がおり、境内墓地には住職の墓があります。境内墓地は両墓制の石らんとどうで埋葬はしていませんが、江戸初・中期の勝れた石仏六〇余基が整理されています。

馬橋相持院

馬橋西口一二四・二

酒々井区にある真言宗東光寺の末寺、本尊は大日如来です。詳細は不明ですが慶長九（一六〇四）年の検地帳に記載がありますので戦国時代には存在していたことでしょう。境内にある墓石は墓参り専用の墓で、死者を埋葬しません。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

馬橋と石仏

酒々井町の石仏は、郷土研究会が昭和五十五年を中心として、数年がかりで全町の石仏一〇〇〇余基を調査したのですが、どういいうわけか馬橋地区には石仏が一一基と異状に少ないのが特色です。酒々井地区一四〇基、本佐倉地区一一四基、尾上地区一一六基、飯積地区八二基と馬橋付近の村々がこんなに多いのに、馬橋地区の少ないのは不思議でなりません。

馬橋の少ない石仏の中で注目すべきものは、相持院境内の六地藏一組と香取神社境内の庚申塔一基です。

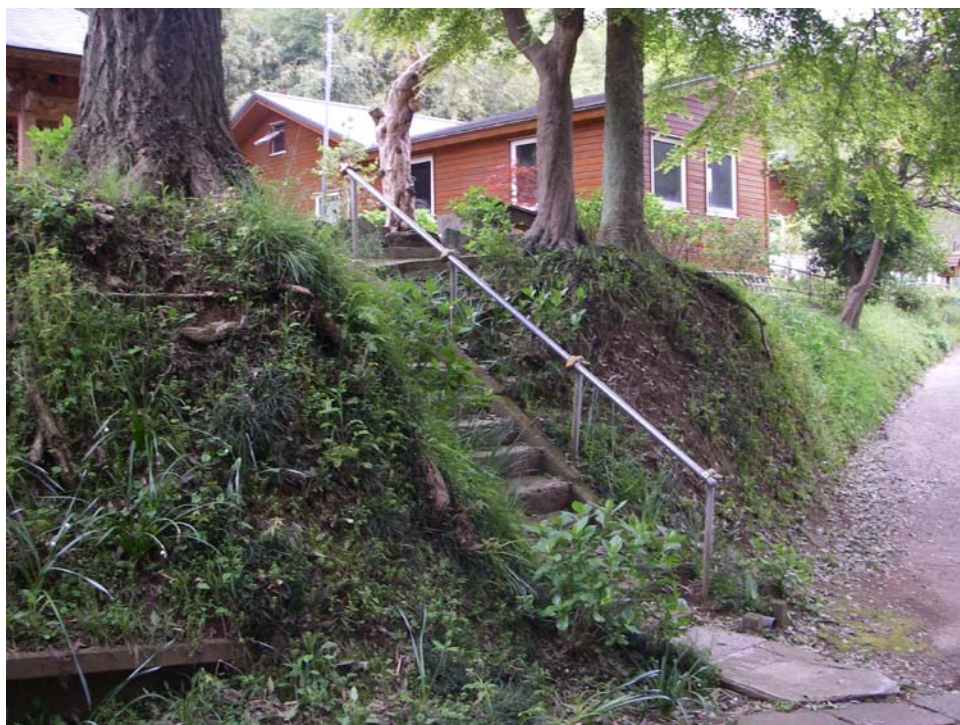
相持院の六地藏は、お堂の横、墓地の中に舟型光背付きの小型のようですが、六基が並んでいます。造立年代も宝暦元年（一七五二）で当町六地藏の中では最も古く、姿形も勝れています。

香取神社の庚申塔は字鷲田の路傍に祀られていましたが、一〇年前ごろかトリ神社境内に移されました。享和元年（一八〇一）酉十一月吉辰の年号が入っており、青面金剛像も巧みに彫刻されています。

墨石井泉光院

墨石井一二二

水流山泉光院、本佐倉にある真言宗文殊寺の末寺、本尊は大日如来。かつては客殿・庫裏・妙見堂などが建っていたと伝わります。現在、お堂には千葉氏の守護神である妙見尊像が安置されています。



中川西蔵院

中川前田三三九

瑠璃山西蔵院、真言宗文殊寺（廃寺）末、本尊は薬師如来。創建は中川地区が開発された慶長年間と伝わります。昭和四十二年に火災に遭い焼失、類焼を免れたのは延命地藏だけでした。また中川地区で行なわれていた獅子舞の頭と獅子太鼓が保管されています。



長勝寺跡・長勝寺脇館跡

上本佐倉上宿一七五

長谷山長勝寺、日蓮宗本土寺（松戸市）末、本尊は釈迦牟尼仏・多宝如来、文明三（一四七二）年に本土寺九世日意上人により建立されたと伝わっています。天文二十（一五五二）年大檀那の吉岡源左衛門尉が寄付した鰐口が国立東京博物館に保管されています。また天正年間に千葉氏の御用商人であった篠田大隅守もこの寺の檀家でした。現在公園となっているこの場所は平成二（一九九〇）年に発掘調査が実施され本佐倉城の家臣屋敷であったことが判明し長勝寺脇跡を名づけられています。



善龍寺跡

上本佐倉上宿一八八

長延山善龍寺、日蓮宗中山法華末、本尊は釈迦牟尼・多宝如来、正安三（一三〇三）年、千葉氏の一族である中山法華寺三世日祐上人の開山と伝わります。明治になり、寺は上本佐倉の妙胤寺に合併し廃寺となり標柱と墓石がのこるだけです。



文殊寺

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

愛宕山文殊寺は本佐倉字五良にありました。酒々井町の西南端、佐倉市長熊に接しており、愛宕神社の北二〇〇メートル、現五良墓地付近にありました。真言宗醍醐三宝院末で、中世には佐倉五か寺の一つに数えられた大寺でした。天保四年（一八三三）の大暴風雨（台風）のため大破し、それ以後廃寺となっています。安政三年（一八五六）の「文殊寺書上帳」（『町史料集』（一）五二）によりますと、境内面積二万九七五〇坪、客殿六八・二五坪、庫裏二九・七五坪、小方丈六坪、地蔵堂九坪と記載されていますが、「大破仕無御座候」となっていて、当時すでに廃寺となっていました。文殊寺は本佐倉の吉祥寺に合併され、仏像・下寺・境内地・山林などの一切が吉祥寺に引き継がれました。詳しい由緒などは判りませんが、おそらく、中世千葉氏と深い関係があった寺院で、千葉氏の滅亡によって、有力な支持者を失い、維持困難となって廃寺となったものでしょう。

『古今佐倉真佐子』には、文殊寺にまつわる「天狗の話」や「さくらの話」その他の面白い話が記されていて、話題の豊富な寺院でした。

文殊寺の下寺は次の八か寺です。

無住寺 勝蔵院（酒々井）・西蔵院（中川）

廃寺 泉光院（墨）・延命寺（尾上）・観乘院

（酒々井）・龍性院（上本佐倉）・常泉院
（本町）・連蔵院（大蛇）

文殊寺のさくら

文殊寺は前記のように本佐倉字五良にあった古刹で、『古今佐倉真佐子』には、境内も広く大きなお寺であったこと、珍しいものがたくさんあったことが伝えられています。

裏門の前には蕨がたくさんあること、隠居所の庭には美しい花の牡丹が多くあったこと、椎の大木が一〇本程あり、椎茸がたくさんとれること、佐倉地方で生椎茸のとれるのはここだけであること、さらに珍しいのは、四隣に知れたさくらの大樹があったことです。このさくらは客殿の前の塚の上にあります。『古今佐倉真佐子』の記述によりますと、太さは三抱えばかり、地上より初めの枝の高さは二間（三・六メートル）ばかりあって、八方に枝が拡がり、枝の長さは十四、五間（二七メートル）、枝先は地に届くほどに垂れさがっていました。全体の高さは一〇間（十八メートル）ばかり、花は八重、二重、三重とあり、七色に咲き、花の盛りには虹の大群がきて密を吸っては飛び廻り、その音はすさまじく、千部のお経をあげているようでした。

花見は佐倉城中はもとより、東金・九十九里・銚子方面の遠方からも毎日訪れ、和歌や俳句の短冊などを下げる者

もあり、茶店も多くでて賑わいました。江戸・京都・大坂その外の国にもこんな名木があるとは聞いたことがありません。もしこの木が江戸・京都・大坂などにあつたら、日本国中に知れわたつたでしょうが、こんな田舎にあるのは惜しいことだと述べられています。『古今佐倉真佐子』にこのように記されているところをみますと、この文殊寺のさくらは、古今稀な名木であつたと推察されます。

（註、『古今佐倉真佐子』は元禄十四年から享保八年まで佐倉城主だつた稲葉家の家臣、渡辺善右衛門が書き残してあつたものを、佐倉市史編さん委員会が解説観光したものです。）

天狗の話

ある年の六月七日の朝五ツ半（七時）ごろ、文殊寺の和尚が、寺の小僧に徳利を持たせて酒を買いに元町まで行かせました。しかしいくら待っても帰ってこないの、不振に思つてあちこち尋ね、寺の前の松並木の所まで行くと、小僧に持たせた徳利が松の枝にかかつていて、小僧は見あたりません。ますます不審に思つて寺に帰って待つてけると、小僧は夕方になって帰ってきました。和尚が叱りつけると、小僧は京都の祇園まつりを見て、今帰ってきたといひます。京まで行くには十四、五日もかかるのに、日帰りで行つてきたというのは大馬鹿ものだと叱りつけておきました。その後一〇日ほどたつて、西国へ行つて帰つてきた

人が寺にきて、よもやま話をするうちに、さる七日の京都の祇園まつりで、この寺の小僧がさじきにいるのを見かけたが、ずいぶん早く帰つてきたものだといひます。和尚は小僧を呼び、祇園まつりの様子をくわしく尋ねたところ、いうことが少しも違つていません。どのようにして行つたのかと尋ねると、その日、徳利を持って松並木の中ほどまで行つたところ、向うから背の高い山伏がやつてきて、今日は祇園まつりだが見物しないかというのでついて行き、まつりを見てきたといひます。それを聞いた和尚は手を打ち、世の中には不思議な事もあるものだ、これは天狗の仕業にちがいないと、だれかれとなく話したので世に知れわたりました（『古今佐倉真佐子』より）。

空鏡院

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

阿弥陀山空鏡院は上岩橋字大崎台、通称城の越にありま
す。真言宗大仏頂寺の末寺ですが、廃寺となつて久しく、
由緒などわかつていません。現在は一〇坪ほどのお堂と大
師堂がひっそりと建っているだけで、訪れる人もない模様
です。

京成電鉄大鷲踏切際の普門品供養塔と六地藏は空鏡院に
付属したものです。

酒々井町の神社

中川水神社

中川広町三十三 一 二

中川の鎮守、由来不明。水神社は水害除けの神社であり、印旛沼沿いの酒々井地区、上岩橋地区にある。



根古谷妙見神社

本佐倉根古谷七八一

根古谷地区の鎮守、妙見尊は千葉氏の氏神であり酒々井町に八社鎮座している。この社の上段に本佐倉城の妙見宮があった。



新宿大鷲神社

酒々井上宿一五九八

新宿の鎮守、酒々井宿の入口にある神社、詳細は不明であるが、新宿は一番新しい宿であり、宿の繁栄を祈願した神社であろう。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

大鷲神社と芝山街道入口

一里塚から荷市へ少しすすむと右側に大鷲神社があります。祭神は天日鷲命です。社殿は昭和四十一年十二月に新築された小じんまりしたものです。内には石像と石宮とが安置されています。

この付近は通称新宿といわれています。境内地に成田街道随一の檜の巨木があったことで知られていましたが、昭和二十年ごろ伐採されて今は根廻りだけが残っています。境内面積は八四坪、町中持であり、氏子数は二一戸と記されています。

ここからさらに西に進むと左側に広い駐車場のあるラーメン店があります。ここは成田街道と芝山街道の分岐点にあたり、米屋という大きな旅館があり、旅人に多く知られていました。芝山街道という大きな石の道標もありましたが、この道標も芝山仁王境内に移されてしまい、今は道路も変更されて昔の面影がどこにも見られません。

酒々井八坂神社

酒々井上宿一六四七

酒々井宿四町(上宿、中宿、下宿、横町)の鎮守、「天王様」とも言う、市姫神も祭っている。八月十六日十七日に例祭が行なわれた、例祭は「飾り神輿」と「揉神輿」が町内を練り歩くもので勇壮な行事であった。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

八坂神社とその付近

中宿から上宿に向いて右側には、元酒々井町役場、現在は農協売店と農協事務所があり、続いて青柳肥前守の末裔と伝えられる青柳医院があります。その先、左側は八坂神社です。伊篠玉垣に囲まれて丹塗りの両部鳥居、その奥に拝殿と本殿が連なっています。

八坂神社の祭神は、江戸時代は牛頭天王と称されていましたが、明治初期の神仏分離に際して、勝蔵院支配から脱して独立し、京都祇園の牛頭天王社が八坂神社と改めたのに習って、社名を変更しました。通称は「酒々井の天王さま」と呼ばれ、毎年八月十六日〜十八日の祇園祭には神輿の渡御があつて賑わいました。交通事情によって長年中絶していましたが、国道五一号線バイパスの完成によって交通が緩和されてからは祭りが復活して賑わうようになりました。

八坂神社の現在の祭神は須佐之男命・伊邪那岐命です。氏子は「きゅうり」を食べると罰があたるといふ禁忌があつて、戦前派固く守られていましたが、戦後は禁忌も解けて食べるようになりました。これも時代の流れでしょう。

上宿から新宿に移るにあたり左側、元成田信用金庫、右側鶴岡家のあるところは、昔、一里塚のあったところでした。一里塚は江戸時代初期に旅人の便を図って徳川幕府が全国

の街道に一里（四キロメートル）ごとに塚を作り、榎を植えさせて安心して旅のできる目標としたものをいいます。

この一里塚の付近には米屋・笹屋・松葉屋・大黒屋などの旅館や、お茶屋・そば屋などがあつて旅人の泊りや急速に利用されていたと伝えられています。二十余年前までは榎の木があり、塚の跡らしい面影が残っていましたが、今はその跡もわからなくなつてしまいました。

横町朝日神社

酒々井横町一八〇九

酒々井横町の鎮守、戦国時代からこの地には大杉神社、文殊院、観乘院などの寺社が集まっていた。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

朝日神社

朝日神社は横町にあります。元酒々井郵便局前から南に入った町並みが横町です。道路に面して玉垣に囲まれ、境内には琴平宮と宝暦四年（一七五四）に造立された如意輪観音の石仏二基があつて、神仏混交時差の名残りをとどめています。また境内地中央に、横町青年館が建てられて各種の行事に使用されています。

社殿は昭和五十三年三月に新築されたものですが、この社殿の中には小型の本田が安置されて、文化十一年（一八一四）に本・社殿が新築されたときの棟札があります。これには町名主・郷名主の姓名が記されていて、昔は町中の神社であつたことがわかります。明示初期の神仏分離の際に横町の鎮守となつたのでしよう。計大地は一三三坪（宗法台帳）、民有地で深山長十郎所有（借地無償）、となつています。

祭神は大日靈女貴命・大物主命の二神です。

酒々井麻賀多神社

酒々井内方二〇四、一

酒々井の鎮守、麻賀多神社は印旛郡総鎮守と伝わる神社で近隣に十九社ある。この麻賀多神社は千年以上前に建立されたと伝わる。祭神は稚産霊命 わかむすびのみこと。例祭は十月十四日・十五日で以前は山車（だし）巡行があり酒々井地区中を引廻した。山車人形は名人三代目仲秀英の作で安政六（二八五九）年、江戸でつくられた貴重な人形。



成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著
麻賀多神社

円福院を出てさらに北に向くと麻賀多神社があります。樹齢三〇〇年を超える樺や椎の木に囲まれて、鬱蒼と繁った中にあります。酒々井の麻賀多神社は酒々井地区の鎮守ですが、平常の管理は下宿・新堀地区の人達で行っています。

祭神は稚産霊命を主神として天香々瀬命・火具土命・水波ノ売命・少名彦名命を合祀しています。合祀社は妙見神社・粟島神社・愛宕神社・水神社などです。

麻賀多神社は印旛郡の東南部、酒々井町を中心として佐倉市・八千代市・成田市・富里町などの地区に十九社、駒形（小麻賀多）神社五社を加えると二十四社があります。祭神はすべて稚産霊命であることから、古代には麻賀多神社のある地区は同一氏族であったと推定され、印波（印旛）国造と深い関係のある氏族の氏神であろうとの説もあります。

古代この地方は麻の山地であり、麻県といわれていたのが転化して麻賀多神社となった（『神社辞典』）との説もあり、五穀を司る農業神であるとも伝えられています。

下台麻賀多神社

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

下台麻賀多神社は字宮ノ前にあります。国道二九六号と、横町から墨方面に出る道の交差点脇に、高い石垣と玉垣に囲まれた近代的な環境の中にあります。昭和五十一年、国道二九六号線工事の際し、境内地の一部が削られたのを機

会に本殿・拝殿・鳥居・灯籠など一切が新造されて荘厳なたたずまいとなりました。御神体は祭神稚産巢日命の高さ六八センチメートルの木彫り像が、鈴木満寿夫氏によって造られて安置されています。

祭神は稚産巢日命・猿田彦命、合祀社は道祖神社・稻荷神社・春日神社。



上岩橋駒形神社

上岩橋天神原一七九五

上岩橋の上郷地区の鎮守、稚産霊命 わかむすびのみこと(と)を主神として祭ります。天文年中、千葉利胤の御一家、木村加賀守胤綱が創建したと伝わります。駒形神は馬や養蚕の神様とされていますが祭神は「麻賀多神社」と同じ稚産霊命であることなのは不思議です。毎年四月の第一日曜日に獅子舞が奉納されています。演目は「とおし」、「むらは」、「弓くぐり」などがあり昭和四六年、町の指定文化財となっています。

上岩橋の獅子舞 町指定文化財

上岩橋獅子舞保存会

この獅子舞の発祥、由来については不明であるが、江戸時代中期より村の行事として伝承されたものである。大正年中一時中絶のこともあったが昭和十年復活されて以後は、村の行事として青年たちによって演舞が継続されている。五穀豊穡を祈願するこの行事を春祈祷、あるいは豊楽と称して、毎年四月三日 元神武天皇祭に村の鎮守である駒形神社、菊賀神社、大鷲神社の三社及び区長宅にて演舞されている。

◎ 演舞の種目と構成

○ 大獅子

とおし	親獅子
中	中
女	女
白	親獅子
弓くぐり	中獅子

○ 小獅子

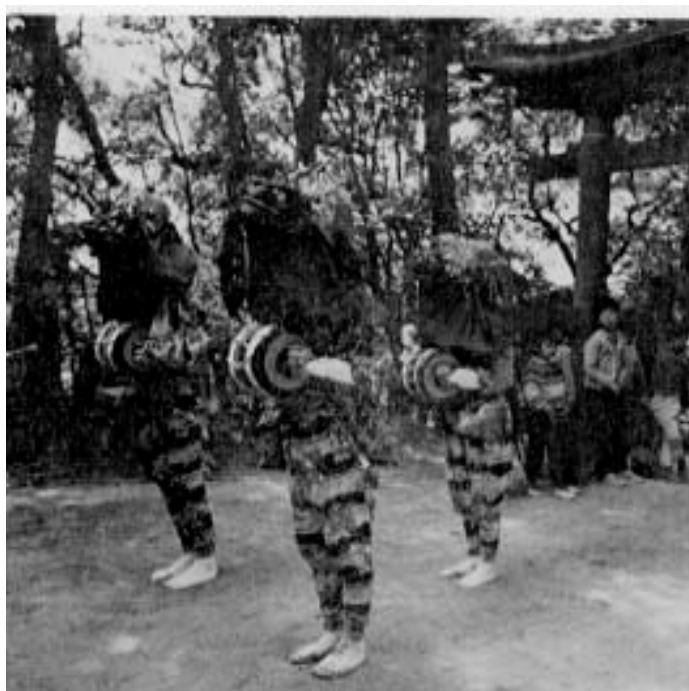
れいところ	親獅子
中	中
女	女

一匹舞



上岩橋の獅子舞

駒形神社、菊賀神社、大鷲神社の三社及び区長宅にて
演舞される



上岩橋菊賀神社

上岩橋中山二〇六三

上岩橋の上郷地区の鎮守、詳細は不明、菊理姫命（くくりひめのみこ）を祭ります。菊理姫命は縁結び、農業の女神様とされています。毎年四月の第一日曜日に獅子舞が奉納されています、演目は「とおし」、「しらは」、「弓くぐり」などがあり昭和四十六年、町の指定文化財となっています。



尾上住吉神社

尾上堂下六三三

尾上区の鎮守、海上交通の神様である住吉神社を祭っています。尾上地区は江戸時代に馬を使用した運送業が盛んな地区でした。祭礼には獅子舞が奉納されたと伝えられます。



飯積伊豆神社

飯積堀の内二九二

飯積区の鎮守、火の神、鍛冶の神様である伊豆神社を祭っています。飯積区には鍛冶作の地名が残っていますので、かつて鍛冶工房があったのかも知れません。また一緒に祭られている子安神社は安産・子育ての神様として有名です。



墨六所神社

墨広畑一〇七九

墨区の鎮守、奥州塩釜神社の神を粟飯原文二郎という武士がもたらし、この神を祭ったのが始まりという。粟飯原は千葉氏の有力な一族で応永十四（二四〇七）年ころ、墨地区の領主であった。また墨地区に伝わる獅子舞は享保十九（二七二四）年、六所神社新築の奉納が始まりとされる。演目は「足揃え」・「芝獅子」・「猿獅子」・「剣の舞」が伝承され、古風な形式を残す獅子舞として昭和四十二年、県の指定文化財となっています。



墨獅子舞保存会

墨の獅子舞は享保年間の発祥と伝えられている。五穀豊穡、干天の雨乞いの祈願をかけて春秋二回、区内神社、寺院等で演舞されていたという。中絶した時代もあったが、大正十五年再開されて以来は毎年七月十五日祇園祭に六所神社、区長宅の二か所で演じられている。

種目は、足揃え、芝獅子、剣の舞、猿獅子等が伝承されている。

獅子三、猿一、笛、大太鼓、小太鼓という構成で古い伝統をよく伝えている郷土芸能である。

馬橋香取神社

馬橋台畑一

馬橋の鎮守、由来は不詳。この地域には珍しい香取神宮が祭られています。この神社では江戸時代から五穀豊穡、家内安全、悪疫退散を祈願し、毎年七月第二土曜日に獅子舞が演舞されます。演目は「芝獅子」・「へいそく」・「猿獅子」・「剣の舞」が伝承されており昭和六二年、町の指定文化財となっています。



伊篠白幡神社

伊篠白幡三〇七

伊篠区の鎮守、創建は不明です。誉田別命(ほんだわけのみこと)を祭ります。この神は八幡大神(宍神天皇)のことで源氏の氏神として有名です。神社には神輿や三匹獅子舞の獅子頭・猿面などが保管されており、かつて盛大なお祭りが行われていたのでしょう。また境内にある神明社にはこの地方には珍しい雨宝童子像(天照大神の化身)が祭られています。昭和二十年二月にB二九爆撃機がこの付近に墜落しました。



柏木七社神社

柏木宮下三七七

柏木区の鎮守、享保五（一七二〇）年の創建と伝わります。天岩戸で活躍した天太玉命 あめのふとだまのみこと）を祭ります。千葉県では安房地方に多く祭られている神です。



上岩橋大鷲神社

上岩橋大鷲

大鷲地区の鎮守、天日鷲命 あめのひわしのみこと、開拓・殖産の神）を祭ります。毎年四月の第一日曜日に獅子舞が奉納されています。大鷲神社は丸い塚の上に鎮座しますがこの塚は低地古墳と呼ばれる珍しい古墳で四世紀ころに築かれたと考えられています。昭和五十八年に古墳の副葬品である「石枕」が発見されています。



本佐倉愛宕神社

本佐倉南大堀三七六

本佐倉地区の鎮守、神仏混合の歴史を残しており加茂建角命、火具土命、將軍地藏を祀ります。鳥居から二百メートルにわたり参道が続ぎ、奈良時代の寺院跡「長熊寺廃寺」と境内地を共有しています。社殿の彫刻はケヤキ材を使用した貴重なもの。江戸時代まで隣接した「文殊寺」の支配にありました。



神明大神社

成田街道酒々井の歴史散歩 相京晴次 著

神明大神社(村社)は上本佐倉の中宿・新宿・清光寺作などの鎮守ですが、本佐倉字向根古谷にあります。これは神仏混交時代には吉祥寺の支配下であった関係でしょう。明治三年、神仏分離の際に、協議の上、外宿の五良神社脇に移転することになり、用地も確保し、届出して許可も受けていますが、『町史料集』(五)二五二、どういうわけかそのままになっています。従って宗教学法人台帳や神社庁の正式書類には外宿になっている珍しい例です。社名も宗教学法人台帳には神明大神社となっていますが、一般には神明神社といわれています。

祭神は天照大神、合祀社は八幡大神社・春日大神社・疱瘡守護社・子安神社・稻荷社・石尊大権現・甲子塔などと多くあります。

境内面積は四五四坪、本殿・拝殿・木造鳥居があります。なお鳥居脇には当町にただ一基しかない愛染明王の石仏が祠に納まっています。

酒々井町の獅子舞

墨の獅子舞

伝承者 墨獅子舞保存会

県指定無形民俗文化財（昭和四十二年三月七日）

墨の獅子舞は、享保十九年（一七三二）墨村の鎮守六所神社の社殿を新築し、その遷宮式に奉納のため、出羽国羽黒山から師を招いて伝授されたのが始まりと伝えられています。五穀豊穰・干天の雨乞いの祈願をかけて春秋二回、区内神社と区長宅で演舞されてきましたが、中絶の時代もありました。大正十五年再開されてからは毎年七月十五日、六所神社と区長宅の二か所で演舞されるようになり現在まで続いています。

その種目は、「足揃え」・「芝獅子」・「剣の舞」・「猿獅子」の種目が伝承されています。獅子3、猿1、笛、大太鼓、小太鼓という構成です。三匹獅子舞で念仏とお練りが伴うことが特徴です。古い伝統をよく伝承している郷土芸能として、昭和四十二年三月七日、県無形民俗文化財の指定をうけているほか、房総の魅力五百選にも選ばれています。

風祭「墨の三匹獅子舞」

この墨の獅子舞は、古くは「風祭」とも言われたそうで

す。この獅子舞の見所は華やかな万灯を先頭にした「お練り」と「念仏」など独特の要素が加わった三匹獅子舞です。「念仏」の歌の内容は、穢（けが）れを祓（はら）う歌だそうです。

最後に獅子舞の家をほめる「ほめ言葉」が、区長宅で行われます。

かつて、舞い手は少年だったそうですが、今は、舞い手も次第に高齢になってきており、次世代への伝承が今後の課題となっており、墨区獅子舞保存会を組織して演技伝承にとめています。

墨区獅子舞

（神社、寺、区長宅で舞う祭に念じられる念仏）

- 一、 千早降ル神ノ鳥居ヲ通ル時ハ
忌ミモ穢レモ突キ失セルケリ （神社）
- 二、 ナイ竹ヲ七節揃エテ
之ヲ神ノ祝イトスル （神社）
- 三、 大寺ノ香ノ煙ハ細ケレド
天ニ上ガリテ黒雲トナル （寺）
- 四、 名主様ハ巧妙ガナル人ナレバ孫彦揃エテ
百万石ノ御支配ナサル （区長宅）

上岩橋の獅子舞

伝承者 上岩橋獅子舞保存会

町無形民俗文化財に指定されています。詳細は不詳ですが、江戸時代中期頃から村の行事として伝承されていたようです。大正年中一時中絶のこともありましたが、昭和十年に復活されて以後は、村の行事として青年たちによって演舞が継続されています。

五穀豊穡を祈願するこの行事を春祈禱あるいは豊楽と称して、駒形神社、菊賀神社、大鷲神社及び上岩橋区長宅で演舞されます。

平成十一年までは毎年四月三日（元神武天皇祭）に行われていましたが、現在は、四月第一日曜日の午前九時から午後三時頃まで、区長宅、駒形神社、菊賀神社、大鷲神社の順番で獅子舞が演舞されます。江戸時代から、五穀豊穡を祈願して行われており、「とおし」「れいとろ」「白羽」「弓くぐり」「一匹舞」の演目を、笛・太鼓の囃子に合わせて演じます。

馬橋の獅子舞

伝承者 馬橋獅子舞保存会

町無形民俗文化財に指定されています。詳細は不詳ですが、江戸時代から伝承されて、五穀豊穡、家内安全、悪疫退散などの願いをかけて、笛や太鼓に合わせて「芝獅子」「へいそく」「猿獅子」「剣の舞」などの演目が奉納演舞されています。

一時期中絶されていましたが、昭和四十三年再興されて以来、熱心な村の青年達によって継続されています。

平成十二年までは毎年七月十五日に行われていましたが、現在は、七月第三土曜日の夕方から、村の鎮守・香取神社で演舞されています。

発祥の由来等については不明ですが、古くは相持院、香取神社、区長宅等において演舞されたといわれ現在は香取神社のみとなっています。

伊篠の獅子舞

酒々井町で祭礼時に獅子舞が行われているのは、千葉県指定無形民俗文化財の墨地区六所神社と、町指定無形文化財上岩橋地区駒形神社・菊賀神社・大鷲神社と、同じく町指定文化財馬橋の香取神社の五社です。ところが、伊篠地区白幡神社に明治後期ころに廃絶したと思われる獅子頭三、猿面二、性神二、神輿一、打ち上げ花火筒一が残されています。

当社の祭礼には、花火が打ち上げられ神輿を担ぎ獅子舞が奉納されていたと思われ、華やかな祭りであつたらうと想像されます。

この獅子頭、猿面、性神、すべてが桐材で、彫刻され卯漆塗りが施され、獅子頭には目・歯などは金箔が遺されていて、堀が深く鼻・口が大きく全般に力強く今でも荒々しく呼吸をしているようです。時代は江戸中期後半と思われる。

獅子舞のルーツは、中国の馬橋（ばきょう）より始まり朝鮮の陰陽道によって六百十二年に日本に入ってきたもので、悪魔をはらい無病息災、五穀豊穡を願つてのことです。獅子という名前もジクウ、ジャジャ、サーシャ、シシカ、シシハ、シシと変化していったというわれ、獅子舞は日本全国で五千とも六千ともあるといわれています。

祭礼に付き物である神輿と打ち上げ花火筒が、何年前に

製作されたのか土地の老人に尋ねると、花火の打ち上げ音をかすかにはあるが覚えがあるということで、一世紀前（明治三十三年）ころのものではないかと思われます。神輿も同じく当寺製作されたものでしょう。

打ち上げ花火筒は、長さ二B一〇センチで、樺材で作られ、底部は直径四〇センチ、上部直径三四センチ、筒穴の長さ一メートル七八センチ、打ち上げに際しての圧力で筒の割れを防ぐために、竹籬（たが）が五十七巻きされている珍しいものです。

中川の獅子舞

獅子頭

伊篠白幡神社（広報平成十二年九月号）に獅子頭三頭がみつかり、町内の獅子頭はこれで終わりと思っていました。西蔵院にも雄獅子一頭、雌獅子一頭をみる事ができました。獅子頭は、火災にあつてはいるもののよくこまで残ったものです。西蔵院の獅子舞が何年頃まで行われていたのかわかりませんが、明治九年の火災以後は行なわれていない様子です。ただ、この獅子頭をよく見ますと、獅子頭がどのような仕組みで組み立てられているのかわかり参考になります。

和太鼓

珍しい太鼓で、現在の太鼓のように革張りが鋳止めでなく、綱張りで引き伸ばされており、胴回りもケヤキではなく杉材が使用され軽く、獅子舞などに使用されたものではないかと思われれます。制作は、江戸時代末期と思われれます。

中川村日記（弘化五年・一八四八）

「獅子舞復活願」

乍恐以書付奉申上候

一 当村鎮守春祈祷の義は往古より有来候三疋獅子鎮守神
前二而興業為致来り候処、拾ヶ年已前戌年より皆止メ
いたし置候間年々病人多而難渋仕候、然ル処従来永年
仕来相止候故にも有之候哉一同相欺候に付、何卒来ル

五日先例の通被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候以
上

支配替二付跡義有之候間、名主耆人ツ、明後十三日宵
詰渡辺嘉平次方へ着可相届候此廻状早々順達留村より
可相返候以上

申四月十一日

伊原軍左衛門様

櫻井盤次郎様

柴田新左衛門様手合

根本小一郎様

大沢真之助様

熊谷豊次郎様

尾上の獅子舞

祭礼には、獅子舞が奉納されていたと伝えられています。